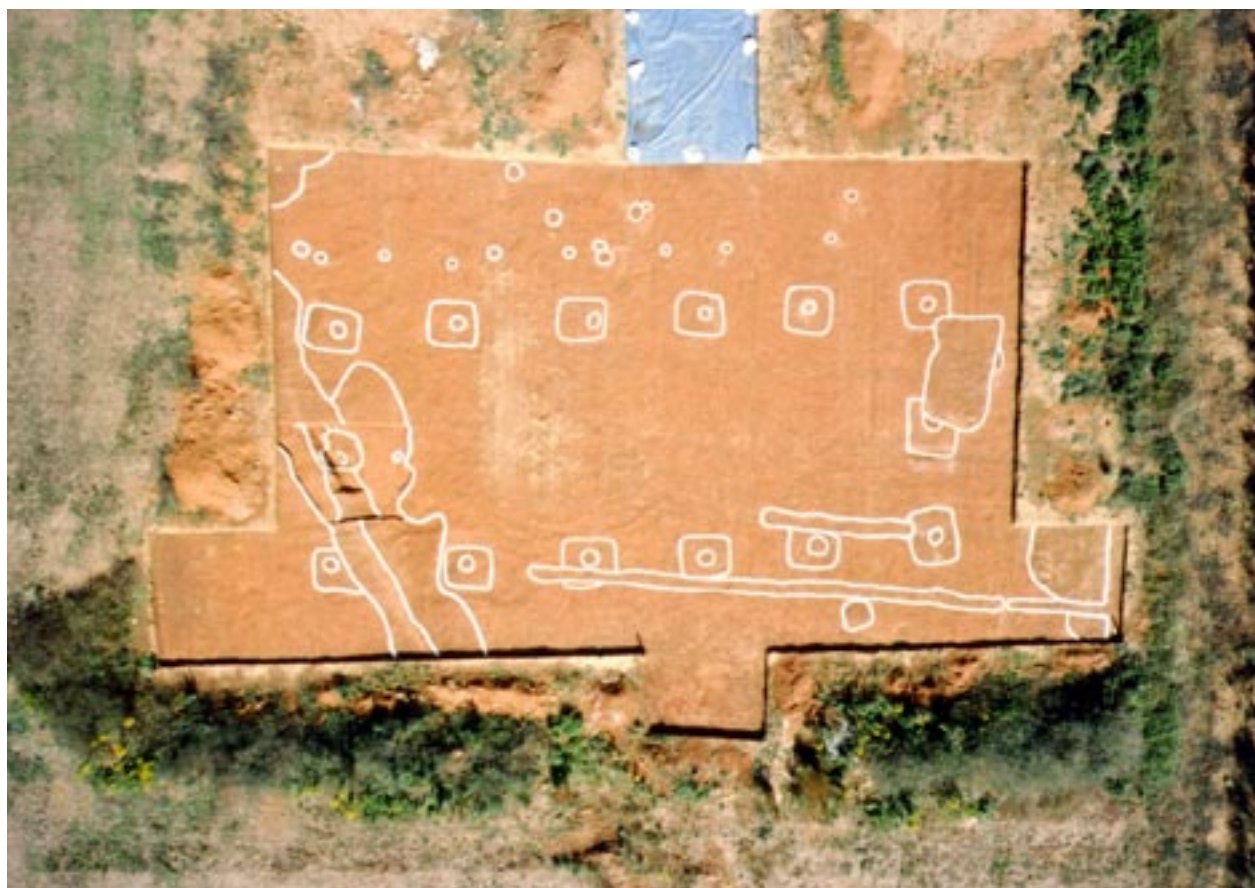


# 伊勢国分寺跡 4

2004年3月

鈴鹿市教育委員会



南東隅 (2) 調査区 SB0301

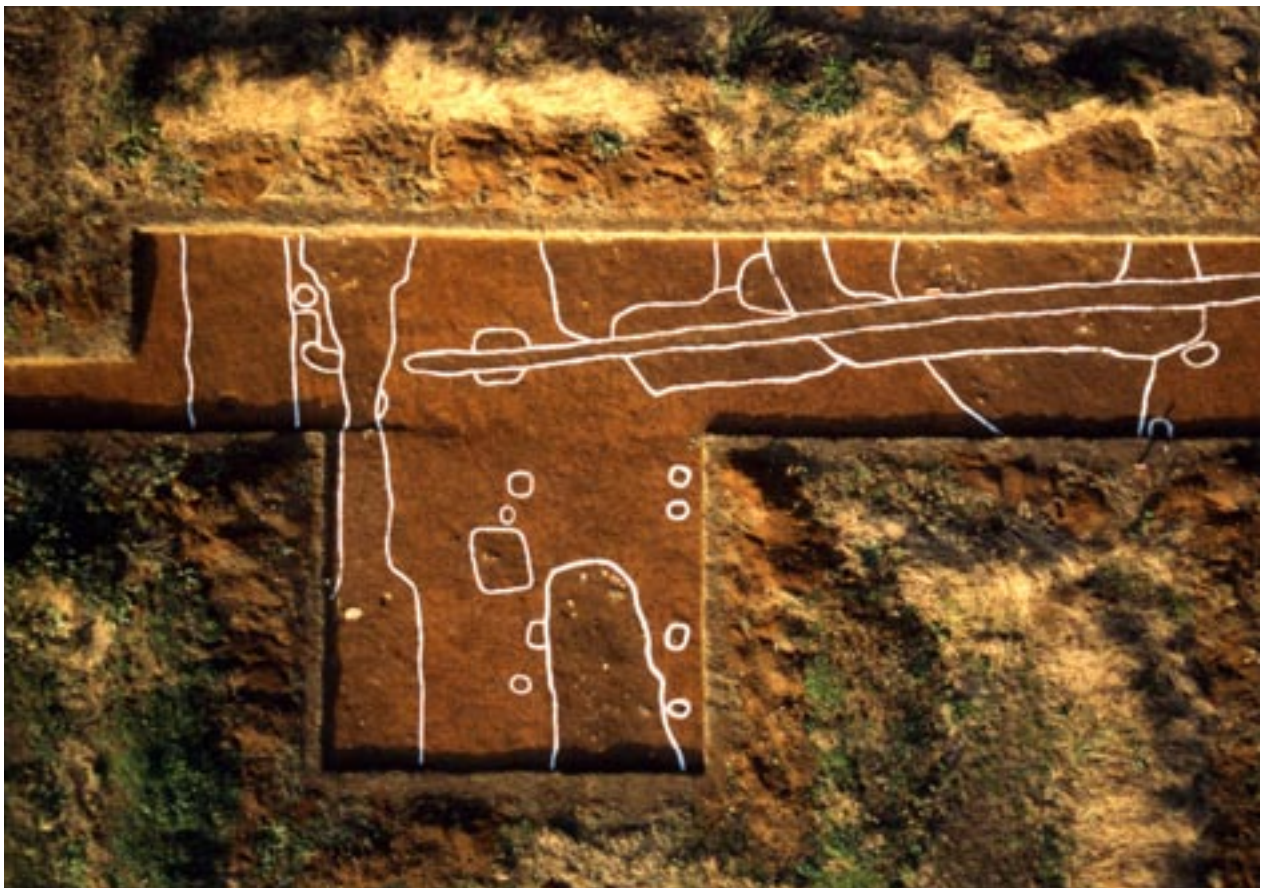


講堂東調査区 SB0302・SB0306





僧坊推定地調査区および北門推定地調査区 (南から)



講堂東調査区 SA0316・SB0311

# 例言

1. 本書は、国・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が2003（平成15）年度に実施した史跡伊勢国分寺跡記念物保存修理事業にかかる伊勢国分寺跡第29次発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体	鈴鹿市教育委員会（教育長 山下 健）		
調査指導	大場範久（鈴鹿市文化財調査会会長） 川越俊一（奈良文化財研究所） 高瀬要一（奈良文化財研究所） 八賀 晋（三重大学名誉教授） 渡辺 寛（皇學館大学教授） 文化庁・三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館		
調査担当	鈴鹿市考古博物館		
（組織及び構成）	参事兼鈴鹿市考古博物館長	林 銀哉	
	副参事兼埋蔵文化財 GL	中森成行	
	埋蔵文化財グループ指導主事	北条正則	副主幹 藤原秀樹 副主査 田中忠明
	技師	水橋公恵	事務吏員 伊藤淳
	嘱託	吉田真由美・林和範	
	臨時職員	坂下日向・杉本恭子・永戸久美子・別府智子・水谷由起子	

3. 調査を実施した個所は三重県鈴鹿市国分町字堂跡297外で、調査の合計面積は2,374㎡であった。

4. 調査期間は平成15年8月4日～平成16年3月15日である。

5. 現地作業は主に藤原が担当し、伊藤・林・水橋・吉田が補佐した。

6. 本書の執筆・編集は藤原が行った。瓦類の整理・実測・採拓は坂下・杉本・永戸・別府・水谷が行ったほか、遺物写真撮影等に吉田の協力を得た。

7. 調査には瀬戸勝子・永戸清・永戸つや子・永戸尚子・永戸久子・永戸ヒナ子・永戸三代・永戸宗武が参加した。

8. 遺跡位置図には国土地理院発行の1/25,000地形図「鈴鹿」「亀山」の一部を使用した。

9. 座標は過去の調査成果との整合性を保つため国土座標第VI系を用いた。図中の方位は座標北を示す。

10. 遺構番号は遺構の種別を示すSA（塀）・SB（建物）・SC（通路）・SD（溝）・SK（土坑）・SI（竪穴住居）・SX（その他）の記号の跡に発掘年次を示す「03」以下に通し番号を付けSB0301・SK03150のように示した。

11. 調査区は、各調査区の通称のほかに、12mの方眼をベースとして北西角の国土座標のY・Xそれぞれの下三桁を組み合わせた251・819といった表示を併用している。

12. 本調査にかかる遺物・写真・図面はすべて鈴鹿市考古博物館にて保管している。

13. 調査及び報告書刊行に際して上記指導委員の先生方の他、地元各位はじめ下記の方々のご協力を得た。

泉雄二・磯村幸男・大川勝宏・加藤真二・駒田利治・鈴木克彦・山下信一郎・和田勝彦

## 本文目次

I. はじめに		5. 北門推定地調査区	8
1. 調査に至る経緯と経過	1	6. 鐘楼（経蔵）推定地調査区	9
2. 遺跡の位置と周辺の環境	1	7. 回廊内調査区	10
II. 調査の成果		8. 回廊南調査区	11
1. 南東隅（2）調査区	2	9. 回廊西（2）調査区	11
2. 講堂東調査区	3	III. まとめ	12
3. 僧坊推定地調査区	6	English Summery	42
4. 僧坊推定地東調査区	8	報告書抄録	43

# 表目次

Tab.1 伊勢国分寺跡調査履歴一覧 2

## カラー図版目次

Color Plate 1 南東隅 (2) 調査区 SB0301 巻頭 1  
講堂東調査区 SB0302・SB0306

Color Plate 2 僧坊推定地・北門推定地調査区 巻頭 2  
講堂東調査区 SA0316・SB0311

## 図版目次

Plate 1	伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡	14	Plate 20	講堂東調査区 SB0306/SK0307	33
Plate 2	調査区位置図	15		855 ライン南トレンチ /SX03101	
Plate 3	南東隅 (2) 調査区遺構配置図	16		867 ライン南トレンチ /北トレンチ	
Plate 4	SB0301・SB0220 平面図	17		207 ライン東トレンチ	
Plate 5	講堂東調査区全体遺構配置図	18		SB0311/SB0311 P-2	
Plate 6	築地 SA0316・門 SB0311 平面図	19	Plate 21	講堂東調査区現地説明会風景	34
	土坑 SK0303・SK0305 断面図			SD0303・SD0305/SK0393	
	掘立柱建物 SB0302・SB0306 および土坑			SB0311・SA0316	
	群平面図			鐘楼（経蔵）推定地調査区全景 /SK0340	
Plate 7	僧坊調査区遺構配置図	20		北門推定地調査区全景	
Plate 8	僧坊推定地サブトレンチ断面図	21		北門推定地調査区全景	
Plate 9	北門推定地調査区遺構配置図	22		SD0352 サブトレンチ	
	僧坊推定地東調査区遺構配置図		Plate 22	僧坊推定地・僧坊推定地東調査区全景	35
	鐘楼（経蔵）推定地調査区遺構配置図			僧坊推定地調査区全景	
Plate 10	北門推定地調査区サブトレンチ断面図	23		SC0360・SD0361/SI0362	
	僧坊推定地東調査区サブトレンチ断面図			SI0362・SI0363・SI0364/SB0378	
	鐘楼（経蔵）推定地調査区サブトレンチ断			SB0379/SB0380	
	面図		Plate 23	僧坊推定地調査区 SK0345・SK0354	36
Plate 11	僧坊・北門配置推定復元図	24		771 ライン北サブトレンチ	
Plate 12	回廊内調査区西トレンチ遺構配置図	25		198 ラインサブトレンチ	
	回廊内調査区東トレンチ遺構配置図			747 ライン南サブトレンチ	
	回廊南調査区東トレンチ遺構配置図			747 ライン北サブトレンチ	
	回廊南調査区西トレンチ遺構配置図			僧坊推定地東調査区全景	
Plate 13	回廊西調査区遺構配置図	26		SD0343・SD03133 サブトレンチ	
	回廊西調査区トレンチ断面図			SD0342 サブトレンチ	
Plate 14	鬼瓦・軒丸瓦	27	Plate 24	回廊内調査区西トレンチ /SB0331	37
Plate 15	軒丸瓦	28		回廊内調査区東トレンチ /SB0332	
Plate 16	軒平瓦	29		回廊南調査区西トレンチ /東トレンチ	
Plate 17	軒平瓦・刻印瓦	30		回廊西調査区東トレンチ /西トレンチ	
Plate 18	土器・陶器・石器	31		SA0367/ 鬼瓦 (参考)	
Plate 19	南東隅 (2) 調査区 SB0301	32	Plate 25	鬼瓦 / 軒丸瓦	38
	SB0301・SK0321/SK0322		Plate 26	軒丸瓦 / 軒平瓦	39
	SD0318・SD0319/SB0301 P-14		Plate 27	軒平瓦 / 刻印瓦	40
	講堂東調査区 SB0302・SB0306/SB0302		Plate 28	刻印瓦・土器・陶器	41
			Plate 29	製塩土器・石器	42



# I .はじめに

## 1. 調査に至る経緯と経過

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上、鈴鹿市国分町字堂跡・西高木・西谷に所在する。大正11年10月12日に国史跡に指定された。

昭和63年度から平成2年度にかけて、鈴鹿市教育委員会によって史跡の範囲確認調査が実施された。その結果、伽藍地は築地塀に囲まれ、ほぼ180m四方の規模であることが確認された。鈴鹿市ではその成果をもとに、平成7年度から三カ年で史跡公有地化を完了した。また、ガイダンス施設を兼ねた鈴鹿市考古博物館を隣接地に建設し、平成10年10月に開館した。

平成11年度から新たに、史跡整備計画策定に必要な中心伽藍の位置・規模の確定を目的とした史跡指定地内の調査に着手した。平成11・12年度は市の単費事業として、平成13年度からは国・県費補助を受け「史跡伊勢国分寺記念物保存修理事業」として実施している。

平成11年度の第22・23次調査は、推定講堂跡を対象として実施した。講堂基壇を検出し、東西規模が約33mであることを確認した。

平成12年度の第24次調査では、講堂基壇の南北規模約21mを確認し、基壇化粧の基底と見られる埴・瓦の列と軒先から落下した状態の軒瓦を検出した。金堂の調査も平行して実施し、基壇は講堂基壇から南に22m離れて確認され、東西約31m×南北約22mの規模であることが確認された。

平成13年度の第25次調査では、中門・回廊の確認が行われた。金堂基壇から南に約31m離れて、中門基壇を確認した。基壇は削平され基礎地業（地形）

## 2. 遺跡の位置と周辺環境

伊勢国分寺跡（1）（番号はPlate1の位置図に対応する）の周辺には関連する律令期の遺跡が多数立地している。国分寺跡の南東0.5kmに立地する南浦遺跡（5）はかつては伊勢国分尼寺跡とされていたが、平成2年度からの調査で国分寺に先行する白鳳寺院の可能性が高いとされ大鹿（南浦）廃寺と命名された。今のところ確実な伽藍遺構は確認されていない。また、同遺跡からは平成10年の調査により大形の掘立柱建物が著しく重複して検出され、豪族居宅や官衙と複合している可能性が考えられる。大鹿（南浦）廃寺に瓦を供給したのは、浪瀬川の谷を挟んで南西1kmに位置する山辺瓦窯跡（8）であることが確認されている。

の最下部がかるうじて残存するのみであった。規模は東西19.5m×南北12mを測る。回廊は外周溝によって規模が確認され、東西68m×南北51m、幅7mで中門と金堂を結び金堂院を形成する。

平成14年度の第28次調査では南北11.2m×東西17.6mの規模の南門基壇を確認した。さらに塔跡を探す過程で、伽藍地の東1/3が南北方向の築地塀によって区画され、さらにその内部が東西の築地塀によって1/2に分けられ、北東と南東の2院を成していることが判明した。南東院の隅からは大型掘立柱建物が検出された。

今年度の調査では、未確認の塔・僧坊・経蔵・鐘楼等を検出することと、第28次調査で確認された院の性格を確認するためのトレンチ調査を行い、遺構が確認された際には必要に応じて調査区を拡張した。

調査は、8月4日の南東隅（2）調査区の表土除去から着手した。作業員は9月1日から投入した。10月24日には南東隅（2）調査区と講堂東調査区で検出された大型掘立柱建物の航空写真撮影を行った。その後は僧坊推定地及び北門推定地、回廊内・南・西のトレンチ調査を中心に作業を進めた。12月25日には僧坊推定地・北門推定地調査区の航空写真撮影を行った。1月23日には伊勢国分寺跡発掘調査指導委員会を開催し、1月31日には現地説明会を開催して、約55名の市民の参加を得た。

その後、記録作業等の補足的な作業を2月13日まで続けた。山砂による遺構面の保護と埋め戻しを行い現地作業は2月27日に完了した。

国分寺跡の南側に隣接する狐塚遺跡では、平成6年度の考古博物館建設に先立つ発掘調査により、台地の先端部を区画する柵列と区画内に整然と配列された倉庫群が検出され、河曲郡衙の正倉院と考えられている。谷を挟んだ東側でも掘立柱建物群が検出され、郡衙政庁や曹司の一部と見られている。

国分寺跡から東に0.5kmの現国分町の集落下には国分遺跡（2）が立地する。出土する瓦等から伊勢国分尼寺跡の有力候補とされているが、伽藍遺構は未確認である。同遺跡から出土する瓦は、西約4kmに位置する川原井瓦窯跡（20）で生産されていたことが確認されている。

国分寺と最も関連の深い伊勢国府跡は、国分寺跡

から西に 7km に位置する長者屋敷遺跡 (24) であることが確認されている。平成 4 年度からの調査により政庁遺構や大形瓦葺礎石建物群が検出され奈良時代後半の伊勢国府跡であることが明らかになった。平成 14 年 3 月 19 日には主要な 3 地点約 70,000 m<sup>2</sup> が国史跡に指定された。ただしこの国府は奈良時代後半か

ら平安時代初頭には廃絶したとみられ、鈴鹿川の対岸に地名として残る「国府」地区に移転したと考えられている。国府地区では三宅神社遺跡 (27) など奈良時代後半から平安時代にかけての大規模な遺跡が確認されつつあるが後期国府の実態はまだ明らかになっていない。

### 伊勢国分寺跡発掘調査履歴

回数	調査年度	遺跡名	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	概要
1 次	1988	伊勢国分寺跡	880920 ~ 881215	450	学術	国分寺築地・掘立・竪穴
2 次	1989	伊勢国分寺跡	891002 ~ 891219	470	学術	国分寺築地
3 次	1990	伊勢国分寺跡 南浦遺跡	901011 ~ 901223	352 150	学術	竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地 掘立柱建物
4 次	1991	伊勢国分寺跡 南浦遺跡	911002 ~ 911225	80 545	学術	土坑 瓦溜・掘立柱建物
5 次	1992	南浦遺跡 国分南遺跡	920907 ~ 921105	200 80	学術	大鹿山 6 号墳・瓦溜 溝
6 次	1993	国分西遺跡 国分遺跡 伊勢国分寺跡	930913 ~ 931124	338 19 142	学術	瓦溜・鬼瓦 ビット 溝
7 次	1994	伊勢国分寺跡	940523 ~ 940731 941201 ~ 950131	3,500	博物館	大型掘立柱建物 掘立柱建物・古墳周溝
8 次	1994	国分遺跡 国分西遺跡	940801 ~ 941030	300 8	学術	尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔 なし
9 次	1994	伊勢国分寺跡	950105 ~ 950228	1,200	博物館	掘立柱建物 (倉庫)・掘立柱塼
10 次	1995	狐塚遺跡	950803 ~ 951016	880	学術	掘立柱建物 (郡衙正倉)・竪穴住居・古墳周溝
11 次	1995	伊勢国分寺跡	950510 ~ 950728	1,200	博物館	溝・土坑・掘立柱建物
12 次	1995	狐塚遺跡・ 伊勢国分寺跡	950626 ~ 960111	2,170	博物館 (進入路)	掘立柱建物 掘立柱建物・竪穴
13 次	1996	伊勢国分寺跡 狐塚遺跡	960415 ~ 970306	3,100	博物館 (進入路・駐車場)	掘立柱建物 大型掘立柱建物
14 次	1996	伊勢国分寺跡	960605 ~ 961002	850	博物館	溝・土坑
14-2 次	1996	国分遺跡	970221 ~ 970221	12	寺院	土坑・灰釉陶器
15 次	1996 ~ 97	伊勢国分寺跡	970307 ~ 970425	650	博物館	溝・掘立柱塼
16 次	1997	国分南遺跡	970424 ~ 970531	1,140	ビニールハウス	掘立柱建物・鋳造遺構
17 次	1997	南浦遺跡	970617 ~ 970816	830	ビニールハウス	掘立柱建物・鬼瓦
18 次	1997	伊勢国分寺跡	970918 ~ 971204	680	博物館 (外周道路)	掘立柱建物 (川曲郡衙正倉)
19 次	1997	伊勢国分寺跡	970929 ~ 980214	3,000	農地造成	掘立柱建物・中世墓・古墳
20 次	1997	狐塚遺跡	980304 ~ 980316	90	土地造成	掘立柱建物
21 次	1998	狐塚遺跡	980805 ~ 980809	1,129	農地造成	竪穴・掘立
22 次	1999	伊勢国分寺跡	990715 ~ 990930	153	学術 (市単)	国分寺講堂
23 次	1999	伊勢国分寺跡	000204 ~ 000331	132	学術 (市単)	国分寺講堂
24 次	2000	伊勢国分寺跡	000508 ~ 000919	216	学術 (市単)	国分寺講堂・金堂
25 次	2001	伊勢国分寺跡	010514 ~ 011031 020207 ~ 020312	1,100	学術 (国補)	国分寺中門・回廊・ 国分寺南門・竪穴・掘立柱建物
26 次	2001	国分西遺跡	010703 ~ 010704	16	個人住宅	土坑・溝
27 次	2001	国分西遺跡	020115 ~ 020131	98	個人住宅	土坑・掘立柱建物・溝・鋳造関係遺物
28 次	2002	伊勢国分寺跡	020509 ~ 030228	1,891	学術 (国補)	国分寺南門・築地・大型掘立柱建物・竪穴
29 次	2003	伊勢国分寺跡	030804 ~ 040312	2,374	学術 (国補)	国分寺僧坊・北門・大型掘立柱建物・築地
合計				29,775 m <sup>2</sup>		

Tab.1 伊勢国分寺跡調査履歴一覧

## II. 調査の成果

### 1. 南東隅 (2) 調査区

#### 調査区の概要

昨年度の 28 次調査により、伽藍地南東隅から掘立柱建物 SB0220 が確認された。調査指導委員会において SB0220 の北側にもスペースがあり同程度の規模の建物が存在しうるのではとの指摘があった。それを確認するため Y=51879 ラインに幅 3 m の南北トレンチを設定した。その結果、SB0220 の北約 9 m の地点から一辺 1 m ほどの柱穴 2 基が 6 m の間隔をお

いて検出された。掘立柱建物が存在するものとしてその規模を確認するため、南北 12 m × 東西 24 m の範囲を拡張し面的に調査した。

#### 基本層序

調査地点の層位は単純で、灰黄褐色の耕作土 0.1 ~ 0.2 m を除去すると、直ちに橙色土の基盤層となる。

#### 遺構

SB0301 東西 5 間 × 南北 2 間の掘立柱建物で、柱間はいずれも 3 m (10 尺) である。柱掘り方は 1 m × 1.2

mの方形で、直径0.3～0.4mの柱痕が明瞭に確認できる。建物の主軸の振れはN1°Wである。南東隅のp-8の柱痕が土師器片を含む以外、遺物の出土は無い。P-14については、SD0328の壁面での観察で少なくとも検出面から0.4mの深さを持つ。東西の妻はほぼSB0220の両妻とラインが一致し、身舎の規模も全く同じである。

**SD0317** トレンチ部の北端で検出された溝である。N35°Eと東に大きく振れる。幅は約2mで、一部の中央に地山が露出し、2条の平行する溝からなる可能性がある。埋土に瓦細片を含む。近世以降の道路痕か。

**SD0318** トレンチ中央部で検出された。最大幅が3mの溝である。南肩は直線的で直角に折れ、溝のコーナー部にあたる部分とみられる。溝の振れはN24°Eである。

**SD0319** SB0301の北側で検出された。幅は3.5mの溝である。埋土からは瓦・埴・灰釉陶器片が出土した。SD0318と埋土の状態も類似し、溝の振れもN21°Eと近いので、一辺11.5mの方形周溝を構成すると考えられる。

## 2. 講堂東調査区

### 調査区の概要

伊勢国分寺跡伽藍地東半は、第28次調査によって南北築地SA0206と東西築地SA0203により南東・北東院に区画されることが確認されている。北東院については今までほとんど調査の手が及んでいない。今回その性格を確認するために全体に12mの方眼を設定し、X=121207とY=51867ラインに沿って幅3mの十文字トレンチを入れて遺構の確認を試みた。すると、207・843～207・867にかけて大きな柱穴が並んで検出されたため掘立柱建物の想定される範囲12×24mを面的に調査した。また、関連建物の有無を確認するため、186・843、210・843、210・855の3トレンチを設置した。また、築地SA0206の延長が予想される部分についても一部拡張した。

### 基本層序

層序は非常に単純で、0.2m前後の褐色耕作土を除去すると赤褐色～明黄褐色土の基盤層が現れる。

### 遺構

**SA0316** 第28次調査築地SA0206の延長上の210・831杭周辺で確認を試みた。上部構造は全く失われる。瓦を含み並行する溝SD0314・SD0312・SD0313から幅約2.1mの基底が推定できる。

**SK0320** SB0301のP-14・15とSK0321を切る土坑である。南北2.8m×東西1.7mの不整な方形をなす。瓦細片・須恵器片・焼土を含む。

**SK0321** SK0320に切られ、東辺のみが検出された土坑である。周囲が焼け埋土に焼土・炭を含む。焼骨は見られない。

**SK0322** 一辺70cmの不整な方形土坑である。周囲が焼け埋土に焼土・炭を含む。焼骨は見られない。

**SK0323** 一部のみが検出された土坑である。円形で、土師器片のほか瓦片を多く含む。

**SA0326** SB0301の北側から1.5mほど北にはなれて直径20cm前後の小柱穴が1.5～2.7mの間隔でほぼ一列に並んでいる。SB0301に伴う足場穴か。

**SD0328** 幅1.5m、深さ0.15mの断面皿状の溝。中央0.7mほどが深さ0.4mとV字状に深くなる。瓦片・近世陶器を含む。第28次調査のSD0228の続き。

**SD0329** 幅1～2.5m、深さ0.2mの浅い溝で、SD0328を切る。28次調査のSD0229の続き。

### 遺物

**石鏃(124)** 黒曜石製で、全長2.3cm。検出時に出土した。

**SA0377** 207ライントレンチの東端で検出した。第28次調査で検出された東辺築地SA0219(SA0224)の延長にあたる。上部構造は全く失われ、両側溝SD0371・SD0372から推定される。残存する基底幅は3mで、方位はトレンチ内ではN8～10°Wと大きく振れるが、両側溝の侵食によるものであろう。

**SB0302** 拡張した198・843、198・855ブロック内におさまる形で検出された。東西7間×南北2間の身舎の南北に庇の付く大形掘立柱建物である。柱間は桁行き3m(10尺)、梁行き8尺(2.4m)で、庇の出は2.4m(8尺)であるが、整然とはしていない。柱掘方も南西隅のように1.5×1.3mと巨大なものもあれば0.8m四方程度のものもある。削るうちに消えていきそうな掘方もあり、かなり削平を受けている。そのためか柱痕・抜き取り痕はあまり明確でない。建物の方位はN2°Wと西に振れる。

**SB0306** SB0302から南に1m離れ、西妻をそろえるように建つ。東西3間以上×南北2間の建物である。竪穴状遺構SI0399や土坑SK03109を切っている。掘方は0.8～0.6mの方形で、0.2～0.3mの柱痕が確認できる。柱間は桁行き2.1m(7尺)、梁行き2.25m(7.5尺)と見られる。掘方・柱痕ともに瓦片を含む。方位はN2°WでSB0302とほぼ等しい。



**SB0311** SA0316の直上で、3 m (10尺)の間隔を  
おいて南北に並ぶ2基の柱穴を検出した。柱掘方は  
両者とも0.9 mの方形で、P-2は抜き取り痕ははっきり  
しないものの中心部から瓦片がまとまって出土した。  
その位置にあわせるように築地側溝が狭まりある  
いは途切れることから棟門の親柱とみられる。

**SD0303** 杭209・819の東に位置する。幅4 m、検  
出面からの深さ0.4 mの断面皿状の南北溝で、埋土は  
わずかに瓦片を含む明褐色土である。SD0305を切る。

**SD0305** SD0303の西側に位置し東半をSD0303に  
切られる。幅3.5 m、深さ0.6 mの逆台形状の南北溝で、  
埋土に瓦片、焼土・炭・土師器片・灰釉陶器片を含む。  
西側から流れ込んだような状態で堆積している。

**SD0308** 186・843トレンチの北寄りを東西に走る。  
幅約1 mで西に向かって削平され浅くなり狭まる。  
埋土に土師器片・炭を多く含む。

**SD0312・SD0313** SA0316の東側溝で、第28次調  
査のSD0210に対応する。ちょうど調査区のところ  
で途切れたため、北側をSD0312、南側をSD0313  
とした。両者の間隔は3.5 mである。SD0312の幅は  
トレンチ北壁で2.8 m、SD0313の幅は南壁で2 mで  
ある。いずれも中央部に瓦片を含むが、密ではない。

**SD0314** SA0316の西側溝で、同じくSD0212に対  
応する。トレンチ北壁で幅1.8 m、南壁では1.5 m以  
上あるが、SB0311およびSD0312・SD0313の途切  
れた部分に対応する5 mの範囲で幅が0.8 mと狭ま  
る。南では瓦片を多く含み、鬼瓦(2)が出土した。  
北は一段削平されているためか瓦の出土はほとんど無  
いが、スラグ2点が出土している。

**SD0315** SD0314のすぐ西に平行する南北溝。幅は  
1.8 m、埋土はやや砂質で締まりが無く、瓦も細片を  
含むのみである。第28次調査のSD0214に対応する。

**SD0371** 築地内溝にあたるが、幅が一定でなく西肩が  
新しい溝SD0398を切るため上層埋土はそれほど古  
いものではない可能性が高い。最大幅4 m、埋土は暗  
褐色で大ぶりの瓦片を含む。

**SD0371-2** 幅0.4 m。SD0371を切る溝。近世以降  
のもので埋土がほぼ礫・瓦片の暗渠状の溝である。

**SD0371-3** 幅1.6 m。同じくSD0371に切られる。  
28次調査の塔推定地調査区で確認された深いV字状  
の排水溝につながるものとみられる。

**SD0372** 築地外溝にあたる。トレンチが東肩まで及  
ばなかったため幅は不明。

**SD0377** 210・843トレンチの南端で検出。L字状  
に折れる。滅失方墳の周溝か。

**SD0390** 幅2 mの東西溝。埋土は灰褐色で、瓦片を  
多く含む。

**SD0392** 幅1.8 mの東西溝。SD0308の続きか。埋  
土は褐色土。これより南側に耕作痕と見られる浅い大  
小の東西溝が5条並行する。

**SD0396** 築地と大形掘立柱建物SB0302のほぼ中間  
に位置する南北溝。SD0397に切られる。埋土は褐色  
土で大ぶりの瓦片・土師器片を含む。

**SD0397** SD0396の西肩を切り並行する溝。幅0.8  
m。埋土は褐色土で瓦細片・円礫を含む。

**SD0398** 幅0.6 m。築地堀に並行する。埋土は褐色  
土で瓦片を多く含む。

**SD03111** 207・831区の北壁から現れるコ字形の  
溝。幅0.8 m、東西内法は4.2 mである。古墳周溝様  
であるが、SK3114等を切っており中世以降のもの。  
埋土は暗褐色で、瓦片を含む。

**SI0399** 210・843トレンチの北寄りで検出した。  
SB0306に切られる。竪穴住居か。埋土は褐色土。

**SK0307** 186・843トレンチの南寄りで検出した。  
南北3.8 m程の不正方形の土坑で、埋土は褐色土であ  
る。検出面の中央部では瓦片が敷き詰められたような  
状態で出土した。

**SK0309** 210・867区北側で検出した。不整な楕円  
形で、南北約4 m。埋土は灰褐色～褐色で、北側では  
土師器など土器片が、南側で製塩土器片・瓦細片が多  
く出土した。

**SK0310** 207・870区の西よりで検出した。2基の  
土坑が重複。埋土は褐色土で焼土・炭・製塩土器片・土  
師器片を含む。

**SK0327** SB0302の東妻に沿うように位置する、南  
北9 m、東西3 m以上の長楕円形の土坑である。埋  
土は黒褐色土で大小の礫を多く含む。須恵器などの土  
器片・瓦片・焼土・炭を多く含む。

**SK0375** 210・855トレンチ南端で検出した。幅  
2 m、長さ3.6 m以上の溝状土坑。埋土は褐色土で外  
側に炭を多く含む。

**SK0376** 222・867区の南側で検出した。南北8.5  
 m以上、東西3 m以上の長楕円形土坑。埋土は褐色土  
で、炭・焼土・土師器・瓦片を含む。鬼瓦(3)が南寄  
りで出土した。

**SK0391** 186・867区北側で検出した。直径5.5 m  
の円形土坑。埋土は褐色土に明褐色土が混じり、瓦片  
を多く含む。

**SK0393** SK0327北で検出した。方形で周囲が赤く  
焼ける。埋土は褐色土に炭・焼土が混じる。焼骨片は

見られない。

**SK0395** 210・867区南端で検出した。不正な楕円形を呈する。埋土は褐色土で礫・土師器片・瓦片を含む。

**SK03100** 210・855区北端で検出した。東西方向に長い溝状土坑。埋土は暗褐色で、焼土を含む。

**SK03107** 南北2m、東西0.8mの楕円形の土坑。埋土は灰褐色砂礫土で、土師器片を含む。

**SK03109** 210・843区北側で検出した。東西2m、南北1.2mの小判形の土坑。SI0399を切り、SB0306に切られる。埋土は褐色土で土師器片を含む。

**SK03110** 207・831区で検出。SD03111に切られる。不正な円形の土坑である。埋土は褐色土で砂礫を多く含む。瓦片・土師器片を多く含む。

**SK03113** 207・831区で検出した。東西8m、南北2.8mの不整な楕円形の土坑。埋土は褐色土で瓦細片を含む。SD0312を切り、SD03111に切られる。

**SK03114** 207・831区で検出した。楕円形の土坑で、南北幅2m。周囲は黒く焼け、褐色土の埋土に炭・焼土を多く含む。焼骨片は見られない。SK03113を切り、SD03111に切られる。

**SX03101** 直径0.15m程の円形ピットで、火葬骨入りの陶器壺が収められていた。

#### 遺物

**鬼瓦 (2)** はSD0314上面から出土。向かって右半分の破片である。焼成は良く、堅緻である。厚みが4cmと薄い。頬から上牙にかけてと2単位の巻き毛がみられる。巻き毛は疎で、凸線により表現され、外側上方になびく。裏面はヘラケズリされる。口唇端と上牙の表現は前田による伊勢国分尼寺I式A(註1)に類似するが、巻き毛の表現は異なり、新型式の可能性が高い。(3)はSK0376上面で出土した。焼成が甘く、風化が著しい。上歯と鼻翼の縁および鼻の穴のみが見られる。伊勢国府I式に似る。厚みは4cmと薄い。小形品である。

**軒丸瓦 (9) (15)** は新田の分類によるII A02型式である(註2)。講堂東調査区SD0303出土である。(20)はII A08型式である。SD0303から出土。(11)(12)もII A08型式と見られるが、範傷部分がなくII A04型式との区別はつけ難い。両者ともSD0303から出土。(21)はII A06型式である。SD0313から出土。

**軒平瓦 (32) (41)** はII B01型式である。(32)がSD0303から、(41)はSK0309から出土した。

(50)はII B02形式である。SD0303・0305上面からの出土した。(53)は外区珠文がやや大きく配置も異なる。SD0303から出土。(55)(56)は重廓文で、

伊勢国府跡からの搬入品であろう。新田の分類によるI A04型式(註3)と見られる。(55)はSK0376から出土。(56)はSK0310から出土。(57)はII A01型式、平城宮の6719Aと同範である。国府政庁から搬入されたものと見られる。207・870区から出土。(59)は新たに確認された、退化型式である。唐草は勾玉を交互に配した様に表現される。外区の珠文も失われている。SK0303から出土。(60)も新たに確認された。退化した型式で、内区と外区の区画線は失われ、唐草は(59)同様に勾玉様で且つ不鮮明であり、外区の珠文のみが目立つ。SK0307から出土。

**刻印瓦 (61)** は丸瓦に刻印される。新田の分類による(註4)I A27「中」Cである。SK0307出土。それ以外は平瓦の刻印で(68)はI C04「ㄨ+?」C、(71)はI A12「中」B、(73)はI A06「人」Cで、いずれも講堂東調査区SK0307から出土。(62)はI A07「人」Dで、207・831区検出時の出土。(70)はI C18「ㄨ+?」Bで、222・867区遺構検出時の出土。

**須恵器杯蓋 (81)** は丸みを持つ天井部と、小さく三角形に垂下する口縁部を有する。SK0310から出土。(82)(83)(84)(86)(88)は傘型の天井部を持ち、一旦水平に開いた後、端部をやや内側に折り曲げて口縁とする。(82)(88)はSK0309から、(83)(84)はSK0327から、(86)はSK0376から出土。

**須恵器杯身 (91) (92) (95) (96)** は底部と体部間の折れはシャープで口縁部まで直線的である。底部外側にやや外反する方形の高台を持つ。(91)はSK0376、(92)はSK0309から、(95)は検出時に、(96)はSK0375から出土。

**須恵器無高台杯 (94)** は底部のみで焼成は甘い。SK0375から出土。

**須恵器鉢 (98)** 口縁端は短く立ち上がる。SK0376出土。

**灰釉陶器碗 (101)** 口縁端部はゆるやかに外反する。SD0303から出土。

**灰釉陶器段皿 (103)** 高台は方形である。SK0303出土。

**灰釉陶器薬壺 (104)** 肩に釉薬が厚くかかる。SD0303最下層から出土。

**土師器甕 (106)** 小型。SD0305から出土。

**土師器杯 (109) (112)** は小型の杯で内面は丁寧に磨かれている。両者ともSD0303から出土。(110)(111)は平底で、口縁部はやや内湾しながらも外に開く。(110)はSK0309から、(111)はSD0305から出土。(114)は大ぶりの杯で口縁部は直線的に立ち上がる。SK0376から出土。

**製塩土器 (116) ~ (123)** はいわゆる志摩式製塩土

器である。器高が比較的高く、器壁の厚みに変化がない(116)(117)(120)と、器高が低く口縁部から体部にかけて肥厚する(121)～(123)がある。(118)・(119)は底部である。いずれもSK0307から出土。常滑焼(115)は壺で底径10.2cm、蔵骨器として用いられていた。SX03101から出土。

(註1) 前田清彦 2000「東海地方の古代の鬼瓦とその系譜」『三河考古』第13号による。

### 3. 僧坊推定地調査区

#### 調査区の概要

僧坊については講堂の背後にあるものと推定され、第23次調査の際Y=51760ラインにトレンチを設定して調査を行っている。その際講堂基壇から14m離れて両側を幅広い溝にはさまれた幅約8mの基盤層が検出されて、僧坊基壇ではないかと考えられた。

今回の調査では、まず推定伽藍中軸線の西側Y=51771ラインに幅3～6mのトレンチを設定した。南側では瓦の詰まった雨落ち状の溝を検出した。北側は溝・土坑状の落ち込みが複雑に重なり合っていて、推定北辺築地付近まで基盤層は全く見出せなかった。両者の間が僧坊基壇の基底部と考えられたが、後世の溝、国分寺以前の遺構等が重なり合っていて基壇ラインを出すことは困難であった。そこで思い切って調査区をX=-121186～-121198間の幅12mを西に向け、僧坊西端を示すと思われる溝が出るまで拡幅した。

#### 基本層序

全く単純で、厚さ0.2～0.4mの耕作土を除去すると直ちに基盤層・遺構面となる。

#### 遺構

**SB0350** 僧坊基壇は地上部分のみならず基礎地業も完全に削平され外周溝からその規模を推定するほかない。外周を巡るさまざまな溝のうち、比較的古いと見られるSD0353・SD0355・SD0358・SD0359・SD0382・SD0387等で囲まれ、基盤層が現れている部分を基壇基底部とすれば南北約9m、中軸線から西へ約36mの規模が復元できるが、決め手に欠ける。

**SB0378** 186・759区の南よりで検出した東西2間の掘立柱建物である。柱間は2.1m(7尺)。主軸はN6°Eとやや振れる。柱穴は一辺0.4mの不整形な方形で、埋土は褐色～暗褐色土である。

**SB0379** 186・747区の南寄りで検出した掘立柱建物である。東西3間×南北2間分を検出した。柱間は東西5.5尺、南北4.5尺。主軸はほぼ正方位である。柱掘方は東西0.6m、南北0.4mの長方形で、埋土は

(註2) 伊勢国分寺跡の軒瓦の分類は基本的に新田剛 2002「伊勢国分寺跡1」鈴鹿市教育委員会に基づく。

(註3) 伊勢国府系の軒瓦の分類は新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会に基づく。

(註4) 伊勢国分寺・国府跡の刻印瓦の分類は新田剛 2004「付論 伊勢国府・国分寺系文字瓦を考える」『企画展文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館に基づく。

灰褐色～暗褐色土からなる。

**SB0380** 186・739区の南よりで検出した東西3間×南北2間の掘立柱建物である。柱間は東西6尺、南北3.5尺。主軸はN11.5°Eとかなり振れる。柱掘方は一辺約0.5mの不整形な方形で、埋土は褐色～暗褐色である。北側柱穴では重複がみられる。

**SB0381** 186・747区から186・759区にかけて検出された、東西4間×南北2間以上の掘立柱建物である。柱間は不均等だが10尺とみられる。柱掘方は0.2～0.3mの円形で、埋土は褐色～暗褐色である。確実に時期を示す遺物は伴わないが、平安時代末以降の建物とみられる。この時期には僧坊は既に荒廃し基壇もかなり削平されていたことがうかがえる。

**SC0360** Y=51771トレンチの南半において西側に雨落ち状の瓦溜まりSD0361を検出した。その東肩は直線的で生きていると考え、トレンチ東半の基盤層面が現れている部分を軒廊と推定した。伽藍中軸線とSD0361東肩の関係から幅6mと復元される。同様に講堂と僧坊間の距離はほぼ12mとなる。

**SD0346** SB0350北辺に沿い調査区東壁から14m西に延びる浅い皿状の溝。最大幅2m。SD0387を切る。

**SD0353** 180・739拡張区の東壁から現れ、西壁近くで南に折れて止まる溝。最大幅4m、Y=51747ラインの断面では幅2.3m、深さ0.4mで断面逆台形のしっかりした溝である。SD0356に切られ、SD0382を切っている。埋土に瓦片を多く含むほか、検出面から須恵器などの土器片がまとまって出土した。

**SD0355** 180・739拡張区の東壁から現れ、SB0350北辺に沿う幅0.4mの溝。SD0356に切られる。

**SD0356** 186・759区北壁から現れSD0350北辺に沿って西に流れ、途中から新旧2つの溝にわかれ180・739区で再び合流し、北に折れて調査区北壁へと至る溝。旧溝はほぼSD0350北辺に沿うが、新溝はS字状に蛇行する。極めて浅い皿状である。

**SD0358** SD0353 から 2.5m の間をおいて現れ、南へ延びる溝。幅 2 m 以上。

**SD0359** SB0350 南辺西端から、南辺に沿って掘られた溝。最大幅 3 m 以上。多くの溝・土坑に切られる。23 次調査のトレンチ調査では講堂基壇まで広がる。

**SD0361** Y=51771 トレンチの西壁に沿って、X=-121198 付近で西に折れ SD0359 へと繋がる。南側では雨落ち状の瓦溜まりが覆っている。幅は 2.2 m 以上。東肩は直線的で、軒廊 SC0360 の側溝であろう。

**SD0382** SD0353 と SD0358 の間を繋ぐように存在する幅約 0.5 m の南北溝。SD0353 に切られる。僧坊基壇西辺の溝か。埋土に焼土・炭を含む。

**SD0383** 調査区東壁から SB0350 基壇の北辺、南辺、中央部から現れた溝が、基壇南の SB0383 付近で一体化し、しばらく基壇南辺に沿って西に向った後、Y=51747 付近で南に折れて調査区外へと至る。東半は埋土が円礫・瓦片を含む砂質の褐色土で幅 0.8 ~ 1 m。西半では幅約 2 m のにぶい赤褐色土～褐色土からなる下層溝が存在する。後世の耕作溝であろう。

**SD0384** SD0383 の 3 条の溝が集合した部分から、南に向かって伸びる溝。幅 2.3m。

**SD0386** Y=51771 トレンチを東西に横断するが、SD0361 に切られている。SD0361 に沿うように南下し、SD03151 に合流する。幅は約 1 m。

**SD0387** Y=51771 トレンチを東西に横断する溝。両肩を SD0346・SD0388 に切られるため正確な幅は不明。最大深さ 0.3 m で大ぶりの瓦片・炭・焼土を多く含む。SB0350 に伴う本来の外周溝の一部か。

**SD0388** Y=51771 トレンチを東西に横断する幅 2.4m の溝。断面は皿状で浅い。SD0387 を切る。

**SD03151** Y=51771 トレンチを東西に横断する幅広い溝。第 23 次のトレンチ調査によると講堂基壇外周溝の一部である。

**SI0362** Y=51771 トレンチ内で検出された。東西 4.4 m × 南北 4.6 m の竪穴住居。方位は N5° E。埋土は褐色土で炭を多く含むが、遺物は見られない。北壁に煙道と見られる突出部を持つ。

**SI0363** Y=51771 トレンチ西壁で検出された。南北 3 m × 東西 3.9 m の竪穴住居。方位は N20° E。埋土は褐色土で、炭・焼土を多く含む。遺物は見られない。東壁に煙道を持つ。SI0364 を切る。

**SI0364** SI0363 に北東 1/4 を切られている。東西 3.8 m × 南北 3.9m の竪穴住居。方位は N19° E と SI0363 とほぼ等しい。埋土は灰褐色土。遺物は見られない。

**SK0345** 186・739 区と 186・747 区にまたがって位置する。北東-南西方向に長い 4 m × 2.6 m の楕円形土坑。埋土は暗褐色土で炭・焼土・須恵器片・土師器片を多量に含む。

**SK0354** SK0345 の西側に位置する。東西 3.6 m × 南北 2.5 m の不整な円形土坑。埋土は暗赤褐色で焼土・炭を大量に含むが、土器は SK0345 に比べ少ない。

**SK0385** 南北 2 m × 東西 1.2 m の楕円形土坑。埋土は灰褐色土で瓦片・炭を多く含む。SI0364 を切る。

**SK0389** Y=51771 トレンチの SD0388 より北側 12m 以上の範囲はほぼ全面に瓦片・土師器片などを含むにぶい黄褐色土層が広がり、基盤層が見いだせない。巨大な廃棄土坑が整地層と見られる。深さは平均 0.3 m 程だが更に落ち込む部分もある。

**SK03150** 186・747 区の南東壁から東西 7.5 m × 南北 3 m 以上の方形土坑が確認されたが、サブトレンチを入れた結果、新しい転地返し跡とみられる。

#### 遺物

**軒丸瓦 (4) (7)** は II A02 型式である。SD0353 から出土。(22) は重圏文である。伊勢国府跡からの搬入品であろう。SK0389 から出土。

**軒平瓦 (40)** は II B01 型式である。186・739 区検出時に出土。(46) (47) は II B02 形式である。(46) は 186・755 区から、(47) は Y=51771 トレンチ南から出土。

**刻印瓦 (63)** は I A22 「川」 B 型式で 186・379 区検出時に出土。(72) は判別不能で、Y=51771 トレンチ中央部検出時に出土。

**須恵器杯身 (74) (75)** は SK0345 から出土。(75) は岸岡山窯産の特長を持つ。

**須恵器脚付短頸壺 (76)** も岸岡山窯産か。SK0345 から出土。

**須恵器短頸壺 (77)** 焼け歪みが著しい。同じく岸岡山窯産のものか。SK0345 から出土。

**土師器甕 (78) (79) (80)** は大きく口縁が外反する。SK0345 から出土。

**須恵器杯蓋 (85)** 平坦な天井から、稜をつくって口縁部へ至る。186・739 拡張区から出土。(87) は平坦な笠状の天上部を持ち、口縁端は小さく折り曲げる。SD0353 から出土。

**須恵器蓋 (90)** やや笠形の天上部に、外にふくらみをもった後、垂下する口縁部を持つ。186・739 拡張区から出土。

**須恵器杯 (93)** 体部が口縁まで直線的に立ち上がる。高台はやや内側につく。SD0353 から出土。



#### 4. 僧坊推定地東調査区

##### 調査区の概要

僧坊調査区を拡張していく過程で、僧坊基壇が東西に極めて長いことが明らかになった。そこで講堂主軸を基に折り返した僧坊東端を確認しておくため、僧坊推定地東調査区を設けた。該当地は、史跡公有地化前から残る果樹の間隙をぬうように X=51805 ラインに幅 2 m の南北トレンチを、それに直交するように Y=-121192 ラインに幅 2 m のトレンチを設けた。

##### 基本層序

非常に単純で厚さ 0.2 m の耕作土を除去すると明褐色土の基盤層となる。ただし、X=51805 トレンチの南側は、深さ 1.2 m まで土壤改良により攪乱される。

##### 遺構

**SB0350** 僧坊基壇と推定されるが地上部分はおろか基礎地業さえも削平されて残っていない。SD0341・SD0342・SD0343 の 3 条の溝で囲まれた範囲を基壇と考えたい。すると推定伽藍中軸線から SD0341 までが約 36.3 m、基壇の幅つまり SD0342 と SD0343 間は約 10 m となる。

**SD0341** 幅約 3 m、最大深さ 0.35 m の南北溝である。断面では 3 条の溝が切りあっている。中央のものが最も古いが、埋土は茶褐色で瓦細片を含むものの締まりがなく、新しい印象を受ける。基壇東辺溝を踏襲して後世に掘り直されたものか。

**SD0342** 幅 5.8 m、深さ 0.8 m の断面皿状の溝である。須恵器片・土師器片と大ぶりの瓦片を含む層が、何層にもレンズ状に堆積しており、後世の攪乱を受けていない。

**SD0343** 幅およそ 2.5 m、深さ 0.3 m の溝である。基壇南辺溝にあたるが、埋土は瓦をほとんど含まない褐色土に基盤層土ブロックが混じり、SD0341 同様後世に掘り直された溝と考えられる。

#### 5. 北門推定地調査区

##### 調査区の概要

北門調査区は、僧坊確認のため設置した Y=51771 ラインの幅 3 m のトレンチの延長として設けた。掘削したところ、北辺築地外溝にあたる SD0352 を直ちに確認した。しかし、内溝は確認できなかったため、築地基底部に沿って東へトレンチを延長した。その結果、内溝 SD0349 を確認したため築地基底部と内外溝の姿が明らかになるよう北に向けて X=51780 ラインでトレンチを北へ拡張した。そのため調査区は基本的に北に開いたコの字形となった。

**SD03131** Y=-121192 の東端で検出された、南西方向に走る溝で、埋土は褐色土で瓦細片が多く入る。SD0341 を切る。

**SD03133** 上部を大きく攪乱されているが、幅 3.75 m、地表面からの深さ 1 m を測る逆台形の溝である。上層は瓦片を多く含む明褐色粘質土、下層が軒瓦類を含め大きな瓦破片を密に含む褐色土である。講堂の改修に伴う溝状の廃棄土坑か。

**SD03134** SD0342 の北側に位置する溝。西壁から南東に流れ、トレンチ内で 45° 振って東行する。埋土は暗褐色土で瓦細片を含むが締まりがなく新しい溝。

**SD03135** Y=51805 トレンチの北端で検出した溝。埋土は褐色土。

##### 遺物

軒丸瓦(17)(19)はⅡ A08 型式で、SD03133 から出土。軒平瓦(23)はⅡ B01 型式で、SD03133 から出土した。(42)(49)(51)(52)はⅡ B02 型式で SD03133 から出土した。(48)も同型式で SD0342 から出土した。刻印瓦(66)(67)はⅠ C03「ㄨ+？」A 型式、(69)はⅠ A11「上」B 型式で、いずれも SD0342 からの出土である。

須恵器杯蓋(89)は平坦な天井部から屈曲して口縁にいたる。SD0342 から出土。

須恵器杯(97)須恵器だが、焼成が甘く黄橙色を呈する。底部には回転ヘラ切痕が残る。口縁に煤が付着し灯明皿として用いられたものか。口径 12.4 cm。SD0342 から出土。

土師器皿(107)は平底から短い口縁部が直立し、端部内面に稜を持つ。SD0342 から出土。

土師器杯(108)はやや外へ開く口縁を有する。SD0342 から出土。

##### 基本層序

層序は非常に単純で、0.3 m 前後の耕作土を除去すると明褐色土の基盤層が現れる。基盤層面も北に向かい緩やかに傾斜する。北東部では特に削平が著しい。

##### 遺構

**SA0351** 全く削平されていて、内外溝により推定復元される。基底部幅は 3.2 ~ 3.4 m を測るが、旧地表面では 2.7 ~ 3 m 程度と考えられる。

**SB0344** 築地内溝 SD0348・SD0349 の間がほぼ 9 m ある。推定伽藍中軸線がほぼこの中央を通ること

と、伽藍地内で確認された門遺構の状況がこれに似るため、ここに北門SB0344の存在を推定した。

**SD0348** 複数の溝が重複するため、最初のトレンチ設定の際には気づかなかったが、Y=51771ラインぎりぎりに東端が覗いていた。東端部は矩形をなす。埋土は褐色土で瓦片を含む。深さは0.1 mである。幅は南に拡張できず不明だが、少なくとも3 m以上ある。

**SD0349** SD0348に対応する溝で、延長6 mを検出した。北肩は直線的で、西端はやや丸みをもつ矩形をなす。埋土は褐色土で瓦細片を比較的多く含む。

**SD0352** 延長15 mを検出した。SD0348・SD0349に対応した途切れはない。南肩はほぼ直線状である。南辺は削平の影響を受けて変化が激しい。比較的残りのよいY=51771ライン付近で幅5 mを測る。同ラインセクションでは南肩付近に幅0.7 m、深さ0.3 mの瓦細片・炭を含む明褐色土の下層溝があり、その上面を厚さ0.2 m程度の瓦片を多く含む褐色土の上層が覆う。上層からは灰釉陶器片などがまとまって出土した。

**SD03116** 調査区何辺に沿って東へ流れ、Y=51780ラインで5 mほど北に折れて、再び築地基底部上を東へ流れる溝。幅は0.8～1.7 m。埋土は褐色土で中央部に瓦片・礫を多く含む。後世の排水溝とみられる。

**SD03117** SD03116の北側を並行するように東に流れ、SD03116に合流する。幅は0.8 mで、埋土は褐

色土で瓦片・円礫を多く含む締まりがない。最も新しい。

**SD03118** 調査区西端ではSD03116・SD03117の間を並行して流れ、Y=51771付近で一旦北に2 m程折れ、再び東に流れ同様にSD03116に合流する。SD03116を切り、SD03117に切られる。幅は0.8 m。埋土は褐色粘質土で、瓦片を多く含む。

#### 遺物

**須恵器(87)**は坏蓋。天井部は平坦で、口縁端は断面三角形状で垂下する。内面に重ね焼きの痕と爪状の痕跡が見られる。口径約16.2 cm。SD0352から出土。  
**灰釉陶器(99)**は浄瓶の頸部。外面に凹線2条を巡らす。内面には絞り目が残る。(100)は碗で、内面全体に釉がかかる。高台は薄く、垂下する。口径約14.8 cm。

**緑釉陶器(105)**は唾壺の口縁部か。直線的に大きく広がり、外面下端に稜が見られる。淡い黄緑色の釉がかかる。これらはいずれもSD0352から出土。

**灰釉陶器(102)**は段皿で、器壁はきわめて薄く、口縁端は大きく外湾する。内外面とも釉が厚くなる。口径約18.4 cm。検出時に出土。

**軒丸瓦(6)(8)**はⅡA02型式、(18)はⅡA08型式である。検出時に出土。

**軒平瓦(39)**はⅡB01型式である。検出時に出土。

## 6. 鐘楼(経蔵)推定地調査区

### 調査区の概要

陸奥国分僧寺などの伽藍配置例を参考として、講堂の南東側のX=121390・Y=51801を基点として幅3 mのトレンチを東に12 m、南に9 mのL字状に設定した。しかし、思わしい遺構・遺物が見られなかったため、さらに基点から南へ15 mのトレンチを設定したところ大規模な瓦溜り土坑を検出した。

### 基本層序

単純で耕作土を除去すると明褐色土の基盤層となる。

### 遺構

**SK0340** 南北が12.5 m以上にもなる巨大な土坑群である。北半は溝SD0346・SD0347によって切られている。大きく北半の土坑、南半の土坑、その間に新しく掘り込まれた瓦廃棄土坑の3つの土坑からなる。

北半は、遺構検出面からの深さが0.6 mの皿状の土坑で、あまり差のはっきりしない褐色土層が3層ほど堆積している。いずれの層も焼土・炭を多く含むが、瓦は細片をわずかに含むのみである。

南半は深さが0.75 mの土坑でさらに南に延びる。

埋土は大きく3つの層に分かれる。最下層はわずかに瓦片を含む粘質の褐色土と基盤層由来の黄褐色土がブロック状に混じる層。次にその上面を掘り込んで形成された、褐色・暗褐色土がほぼ水平に堆積する層で、上面は堅く締まった整地層である。その上層には雨落ち溝的な瓦堆積層が重なる。

南北の土坑の間を分断する瓦溜り土坑は大きな破片が多く、まだ瓦の隙間が土で詰まりきっておらず新しい。位置的に見て、金堂とそれに取り付く北辺回廊の基壇築造のための土取り穴に改築時や廃絶後の廃棄土坑が重なりあっているのであろう。

**SD0346** 東トレンチでは幅1.4 mで、N 70° Wの傾きを持つ溝。西トレンチではSD0347と一体となる。埋土から近世陶器が出土。

**SD0347** 東トレンチ南端に現れ、西トレンチではSD0346と一体となる。両者は平行し、28次調査で検出された道路跡SC0207の側溝と見られる。

**SD3126** 幅約1 mの南北溝、SD0346に切られる。

**SA03127** 一辺0.4 mと小ぶりだが暗褐色の埋土をも

つ柱穴を2基検出した。方位はN9°W。

その他、小規模な瓦溜まり土坑を3基検出した。

#### 遺物

軒平瓦(24)(25)はⅡB01型式、(43)はⅡB02型式である。SK0340から出土。(58)はまだ型式設

## 7. 回廊内調査区

### 調査区の概要

伊勢国分寺の回廊は中門と金堂を結んで金堂院をなす。回廊の配置や規模は東西68m×南北51mと陸奥・遠江・但馬国分僧寺と比較的類似し、これらはいずれも回廊外に塔が配置される。そのため回廊内に塔が存在する可能性は低いと考えられた。しかし、候補地を絞っていくために、伽藍中軸線をはさんで東西2トレンチを設定して調査を行った。

### 基本層序

褐色の表土0.2mを除去すると、第2層として全く締まりの無い赤褐色～明赤褐色の土層が全面に広がっている。この層は瓦類を多く含み、西トレンチおよび東トレンチ西寄りでは0.2mと厚く、東トレンチ東に向かってやや薄くなる。この層を除去すると、明褐色土の基盤層があらわれるが、部分的に第3層として旧耕作土と思われる粘質の褐色土が0.2～0.1mの厚みで基盤層上に残る部分もある。第2層は、金堂基壇を取り崩した際の土を広げ畑のかさ上げを行ったことによって生じたものである可能性が高い。

### 遺構

SB0331 西トレンチ北西隅付近から南東方向に向かって1m強(3.5尺)間隔で、一辺0.5mの柱穴が6基検出した。6間以上×2間以上の掘立柱建物の北側にあたとみられる。柱掘方には瓦片は含まれない。方位はN69°W。

SB0332 東トレンチの西寄りでは、5間以上×2間以上の掘立柱建物を検出。柱間は北側・東妻ともに1.35m(4.5尺)である。柱掘り方は一辺が0.7～0.6m×0.5mの東西に長い長方形で、柱掘方には瓦片は含まれない。方位はN77°W。

SI0333 西トレンチの南西隅で検出した竪穴状方形土坑である。北辺は3.3mで、方位はN67°W。

SI0334 西トレンチの中央部で検出した竪穴状方形土坑である。北辺は2.9m、西辺で2.3m以上である。主軸はN63°W。埋土上面から古墳時代須恵器片が出土。SK0338に切られる。

SI0335 東トレンチの北東隅で検出した。SK0337に切られている。西辺のみの検出で規模等は不明。西辺

定されていない。唐草文であるが蔓の曲線は硬く、唐草の一単位に先端がかぎ爪状に巻きつく子葉が4～5本配され、飛雲文のように見える。検出時に出土。

刻印瓦(64)は丸瓦に、(65)は平瓦に刻印され、いずれも印面は判別不明。SK0340から出土。

の傾きはN41°W。

SK0335 東トレンチ東半の北壁際で検出した。東西3mの楕円形を呈する土坑。東寄りで瓦片を多く含む。

SK0337 東トレンチ南東隅で検出した。SI0335を切る。掘り方いっぱいまで瓦片が密に詰まっている。

SK0338 西トレンチ中央、南壁で検出した。東西幅3.5m。瓦細片を含み、西寄りではやや密である。SI0334を切る。

SK0339 SK0338から約2m離れ、東に位置する。東西幅3.6m。やや大振りの瓦破片を含む。

その他の遺構として掘立柱建物のものと思われるが建物としてまとまらないピットがSI0334・SI0335周辺に数基見られる。さらに瓦の細片を含む大小ピットや南北溝等を複数検出したが、埋土の状況から後世の耕作等によるものと判断した。

### 遺物

いずれも第2層とした、金堂基壇等を削平した際に生じた整地土層からの出土である。

鬼瓦(1)は東トレンチから出土。向かって左半分の破片である。眉間に釘穴を持つ。巻き毛は密で外側の上に向かってなびく。口には下牙が見られる。外縁に珠文を巡らせる。珠文・巻き毛の部分には大きな範ずれの痕が残る。そのためか顔の表現もあまり均整が取れていない。厚みは6cmある。裏面は大きくヘラケズリされる。いわゆる南都七寺式の範疇に入る。

軒丸瓦(5)はⅡA02型式で東トレンチから出土。(10)はⅡA03型式で外縁を持たないもの。西トレンチから出土。(14)はⅡA03型式で外縁を有するもの。西トレンチから出土。(16)はⅡA08かⅡB04型式のいずれか、西トレンチから出土。

軒平瓦(25)(30)(34)(37)はⅡB01型式で、西トレンチから出土。(26)(29)(33)(36)もⅡB01型式で、東トレンチから出土した。注目されるのは(30)で、これのみⅡB01型式が共通して左上隅に有する三角形の範傷を有しておらず初期の段階の範によるものとみられる。(44)(45)はⅡB02型式で、東トレンチからの出土である。

## 8. 回廊南調査区

### 調査区の概要

回廊と南辺築地の間には30m強のスペースがある。わずかな窪地となっており瓦の散布もほとんど見られず塔跡が存在する可能性は極めて低いとみられた。しかし、候補地を絞っていくためX=-123124ラインに伽藍中軸線をはさんで幅1mで、延長が東32m、西30mのトレンチを設定して遺構の有無をみた。

### 基本層序

単純で、0.1～0.2cmの耕作土を除去すると、黄褐色土の基盤層となる。

### 検出遺構

SD03147 東トレンチの西端で検出。幅1.5mの南北方向の溝で、瓦細片を含む。

## 9. 回廊西（2）調査区

### 調査区の概要

回廊西辺から西辺築地推定ラインまでの距離は約30mである。伽藍地西端に塔が所在する例もあるため、第28次調査において回廊から西10mの地点に延長70mの回廊西トレンチを設定し調査したが、十分な成果は得ていない。今回は、さらに西辺築地との間、Y=51723ラインに42mの南北トレンチとX=-121270ラインに10mの東西トレンチを設定して、西辺築地の正確な位置とその内部の状況を確認することにした。

### 基本層序

調査区周辺には、史跡公有地化直前まで農業用施設が営まれていた。その影響が著しい。南北トレンチ南半では、0.1mの耕作土の下に、0.3mのビニール等を含む攪乱・整地層があり、その下が直ちに明黄褐色の基盤層である。北半は複雑で0.1～0.3mの耕作土の下に、0.1mの地山土による整地層があり、その下が約0.2mの旧耕作土、そして明黄褐色の基盤層となる。東西トレンチでは、0.15mの耕作土を除去した段階で築地基底部が現れた。しかしそれ以外の範囲は攪乱が著しい。

### 遺構

SA0367 西辺築地の基底部である。上部は完全に削平を受けていて、内外溝から復原される。基底部幅は3.2mを測る。

SD0368 築地内溝にあたる。ただし、後世の整地によって溝内と東肩はほとんど抉り取られ、底部東端に本来の掘り方と堆積が残るのみである。この攪乱は築地側の肩にまで及んでいる。おそらくは耕作の邪魔と

SD03148 西トレンチの東端で検出。SK03145に切られる。幅1.0m、南北方向の溝で埋土は砂質。

西トレンチにはさらに西側にも4条の溝状の落ち込みがほぼ3m間隔で4条見られたがいずれも埋土のしまりが無く、近年の耕作に伴う新しい溝と判断した。

SK03143 東トレンチの東端で検出。直径1mで、ほぼ正円形の土坑である。焼土・炭・土師器片を含む。古墳時代後期のものか。

SK03145 西トレンチの東端で検出。SD03148を切る。埋土にしまりが無い。

SK03146 東西3.2～3.5mある。瓦溜まり土坑で大型破片も多い。ただし埋土にしまりは無く新しい。

なる瓦溜まりを全て掘り去ったのであろう。僅かに残る底部から、検出面からの深さ0.4m、幅約2mの逆台形と推定される。攪乱は東へ0.3～0.4mの深さで連続する。

SD0369 築地西溝にあたる。こちらも同様に後世に内部を大きく掘り込まれ、攪乱は築地基底肩に及んでいるが、底部にまでは及んでいない。検出面からの深さ約0.4m、幅1.6mの逆台形である。

SD03139 X=-121268地点を東西に走る幅0.5mの溝である。瓦片を多く含む。

SK03137 南北トレンチの北端5mで検出した。下層には角の取れた瓦小破片・礫や腐葉を含む堆積が広がり極めて新しい廃棄土坑である。

SK03138 直径0.8m以上の円形土坑である。埋土はにぶい黄褐色である。

SK03140 南北トレンチの中央部に13m以上にわたって広がる土坑状の落ち込みである。埋土は褐色土で所々に地山土のブロックが混じり、瓦片を含む。

SK03141 直径1.8m以上の円形土坑である。埋土はにぶい黄褐色で、僅かに瓦片を含む。

SK03142 直径0.8m以上の円形土坑である。埋土はにぶい黄褐色土である。

### 遺物

軒丸瓦(13)はⅡA03型式の外縁を有するタイプ。SK03137出土。(28)はⅡB01型式である。南北トレンチ攪乱層から出土。

軒平瓦(54)は重廓文である。伊勢国府からの搬入品であろう。ⅠA04型式と見られる。南北トレンチ攪乱層から出土。



### Ⅲ. まとめ

**南東隅(2)調査区** 28次調査で確認された南に庇を持つ東西5間×南北2間の掘立柱建物SB0220から北に9mの間隔をおいて、無庇の東西5間×南北2間の掘立柱建物SB0301を確認した。両者は身舎の規模を同じくし、両妻をそろえていて、同一時期に計画的に建てられたと判断される。SB0301の北側には古墳の痕跡が築山状に残っていたと推測されるので、この2棟で1つの施設を構成していたと考えられる。このような建物群はまだ調査例が乏しく仮設の仏堂、指導的立場にある僧の坊、政所院・大衆院、造営のための寺務所といったいくつかの可能性が考えられるが、出土遺物に乏しく性格不明といわざるをえない。

**講堂東調査区** 新たに東西7間×南北2間で、二面に庇を持つ大形建物を検出した。掘立柱建物としたが柱掘方は浅く、検出のため削ると消えそうなものがあって、掘方の規模との兼ね合いが不自然である。またSB0302範囲と重複する中世以降のピットがほとんど無いことから、ある程度の高さを持つ基壇が存在した可能性も捨てがたい。柱穴と見たものが礎石の据付穴あるいは壺地業の最下部であった可能性も考えられる。この点はもう少し注意深く検討すべきであった。

28次調査で確認した伽藍地の東1/3を区画する南北築地塀とそれを南北1/2に区画する東西築地塀により、南東院と北東院が存在したと推定した。SB0302は北東院の中心的建物であろう。周囲にはこの建物に伴うと見られる炭・焼土・土師器・須恵器そして製塩土器といった遺物を多く含む廃棄土坑が取り巻くように分布する。このことから、日常生活に極めてかわりの深い場である。SB0302を食堂、北東院を大炊院と考えるのが妥当ではないか。

SB0302と講堂の間には南北築地が存在するが、設定したトレンチ部分で西側側溝が幅3m途切れ、ちょうどその部分の築地基底中央に3mの柱間で南北2基の掘立柱柱穴が検出された。おそらくは講堂とSB0302間を往来するための通用門的な棟門が存在した可能性が高い。近辺溝から鬼瓦(2)も出土している。**僧坊推定地・僧坊推定地東調査区** 僧坊SB0350の基壇は全く削平されている。これまで確認してきた主要伽藍では基壇外周に基壇構築のための土取りと廃棄土坑をかねた深い溝が巡っていることが確認されている。しかし、僧坊の場合それらしき状況をとどめるのは、東調査区の北辺溝SD0342のみで、その他は後世に瓦を除去するために再掘削されたか、基壇を避

けるように掘られた中世以降の区画溝であってほとんど使えない。西に拡張していった初めて現れた南北溝と推定伽藍中軸線の距離が36m(120尺)と切りのいい数字で、中軸線から東に折り返した東調査区内にもほぼ36m地点に南北溝が存在するため、両溝の間72m(240尺)を東西規模と推定した。南北規模はSD0342の南肩を1つの規準とし、溝に囲まれ基盤層が現れている部分とすれば、東西9mが妥当な数字であろう。しかし、軒廊の雨落ち溝SD0361はその東手前約3mで途切れるため、幅12mの可能性も捨てがたい。少しでも遺構の残りの良いと見られる、東調査区周辺でさらに追加調査が必要であろう。

軒廊は雨落ち溝SD0361と伽藍中軸線の関係から幅6mと推定される。講堂・僧坊間の距離は18m(僧坊幅を12mと見れば15m)となる。

**北門推定地調査区** 北門も全く基壇・基礎地業を失っている。ちょうど推定伽藍中軸線のところで築地内溝が幅9m途切れており他の築地・門のありかたから北門が存在した可能性が高いことが推定される。僧坊と北辺築地の距離は辺々でおおよそ25mである。

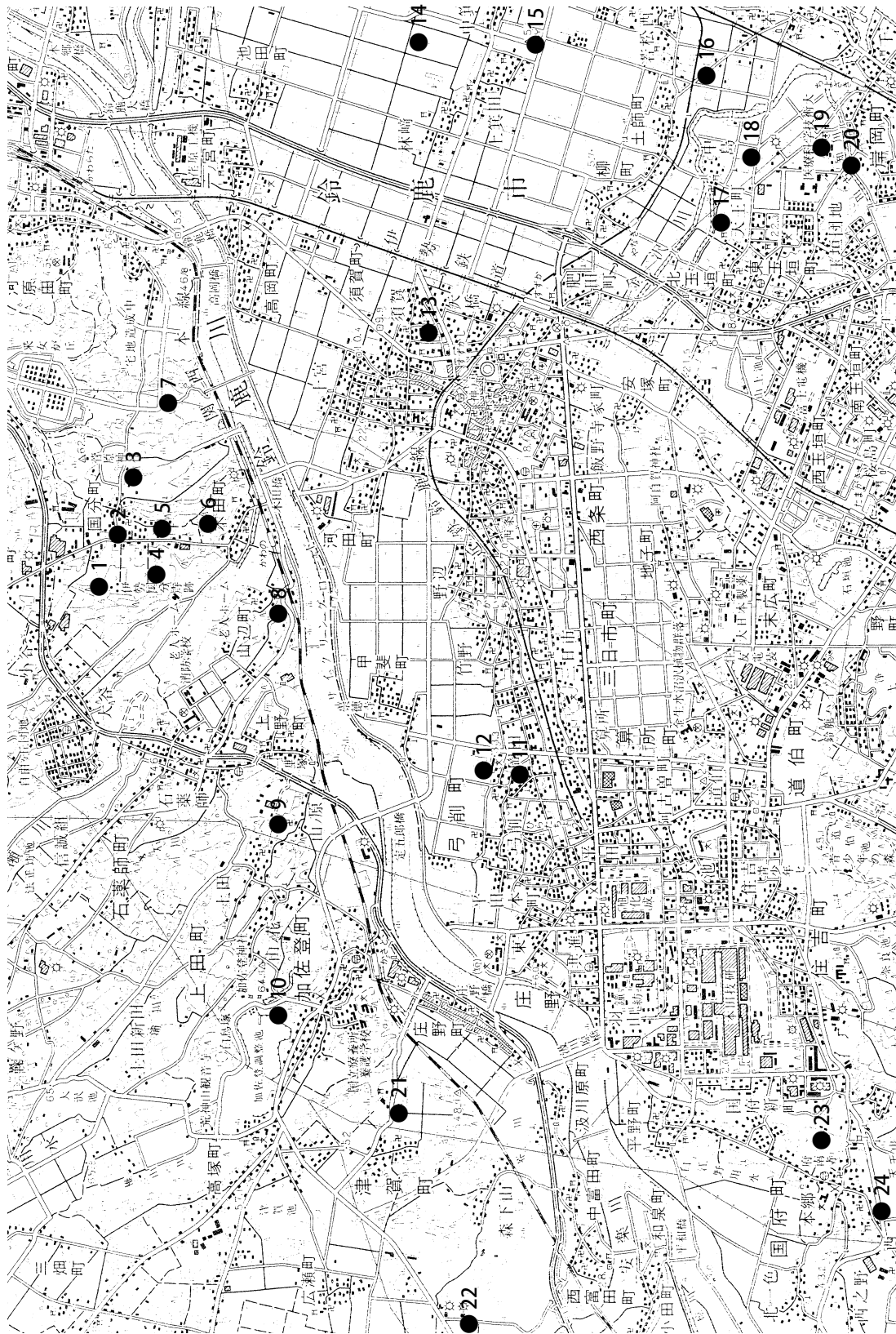
**その他の調査区** 鐘楼(経蔵)推定地・回廊内・回廊南・回廊西(2)の調査区には見るべき成果がなかった。**遺物** 回廊内調査区から鬼瓦(1)が出土した。出土状況から金堂に用いられていた可能性が高い。さらに南門付近から同型式鬼瓦の左顎部分の破片が採集されていることが資料調査で判明し、やや崩れているものの南都七大寺式系の鬼瓦が伊勢国分寺に採用されていたことが判明した。また、国分寺跡出土とされる右下半部分の破片が紹介されていて(註5)、前田によれば外縁に珠文帯を持つ南都七大寺型式は伊勢国分尼寺Ⅱ式と認定されている(註6)が、今のところ特に伊勢国分尼寺(国分遺跡)に結びつける根拠に乏しい。

**最後に** 29次調査の結果、180m四方と考えていた伽藍地のうち東1/3は国分寺運営のための機関が営まれ、すると本来の意味での伽藍地はかなり狭いものとなる。また、塔跡がいまだに発見されないことからこの史跡伊勢国分寺跡は尼寺ではないかという意見も根強い。ただし、尼寺であることを積極的に裏付けるような遺構・遺物も発見されていない。次年度も塔の発見を主眼とした確認調査を継続する予定である。

(註5)『三重の古瓦』刊行会1996『三重の古瓦』

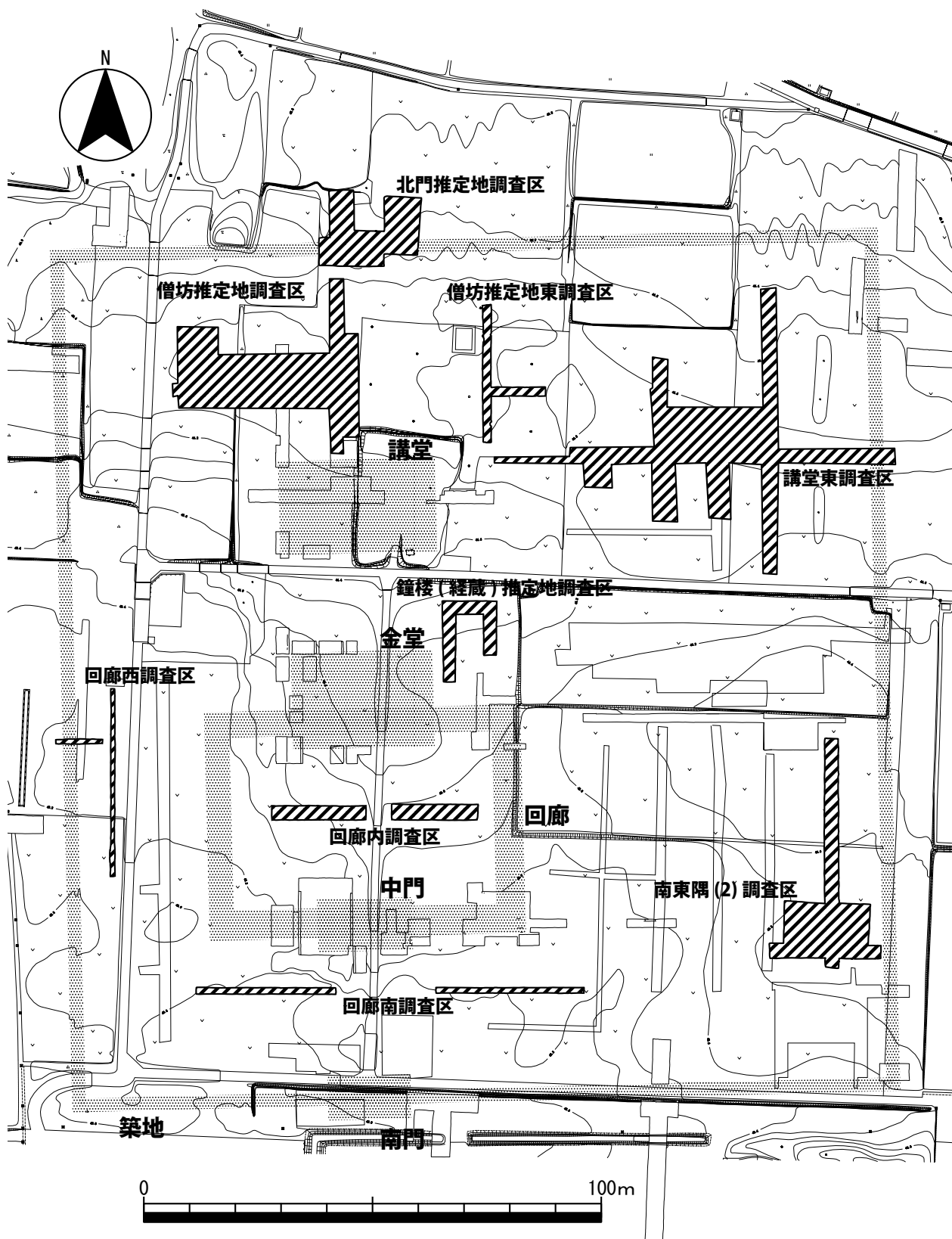
(註6)前田清彦2000「東海地方の古代の鬼瓦とその系譜」『三河考古』第13号による。

# 图 版



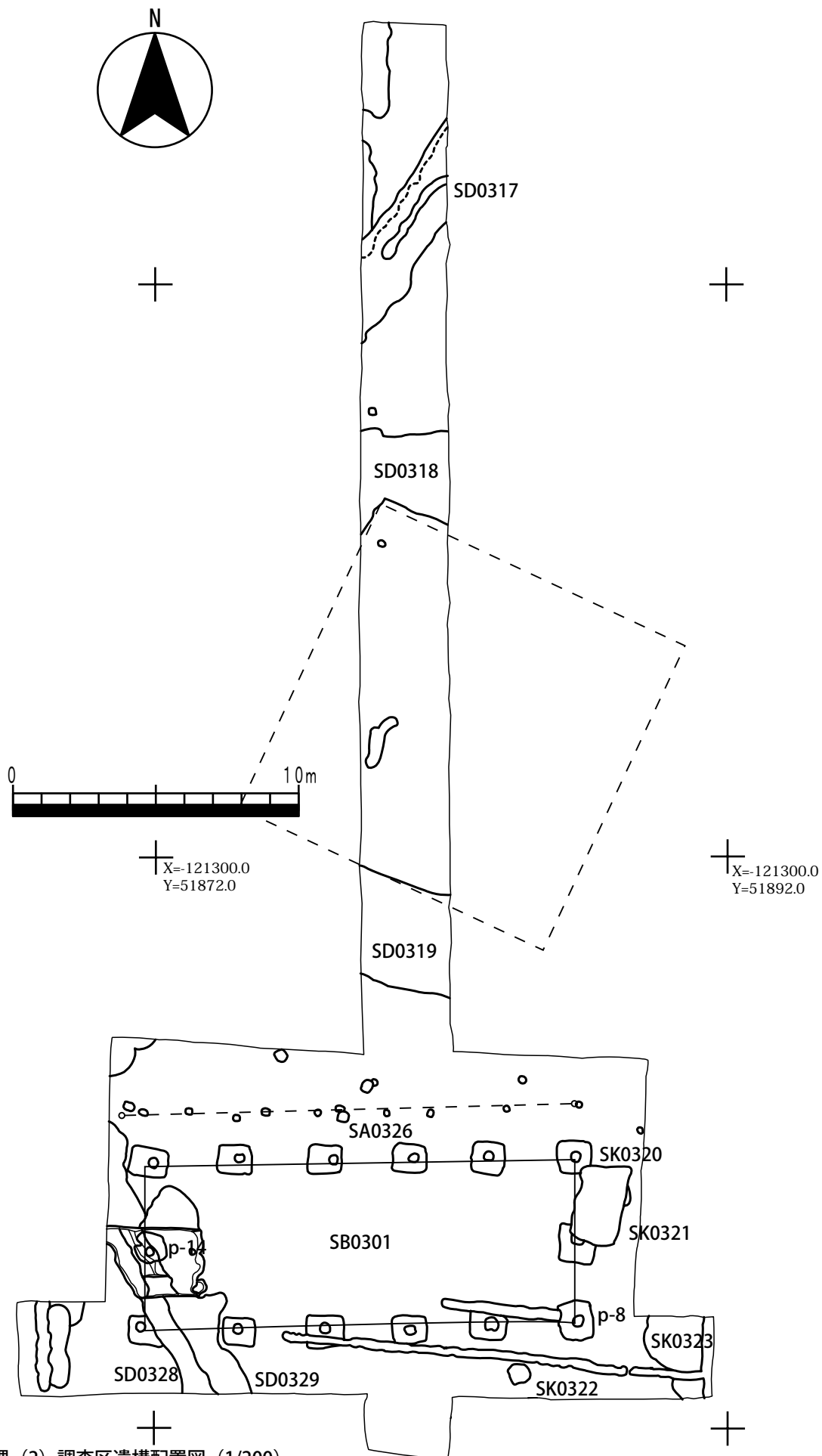
伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

- 1. 伊勢国分寺跡
- 2. 国分遺跡
- 3. 国分東遺跡
- 4. 狐塚遺跡 (川曲郡御跡)
- 5. 南浦 (大鹿) 廃寺
- 6. 木田坂上遺跡
- 7. 寺山遺跡
- 8. 山辺瓦窯跡
- 9. 山ノ原遺跡
- 10. 川原井遺跡・瓦窯跡
- 11. 岡田南遺跡
- 12. 岡田遺跡
- 13. 須賀遺跡
- 14. 大木ノ輪遺跡
- 15. 上箕田遺跡
- 16. 土師南方遺跡
- 17. 深田遺跡
- 18. 双ツ塚遺跡
- 19. 天王遺跡
- 20. 天王屋敷遺跡・廃寺
- 21. 津賀平遺跡
- 22. 伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡)
- 23. 梅田遺跡
- 24. 三七神社遺跡

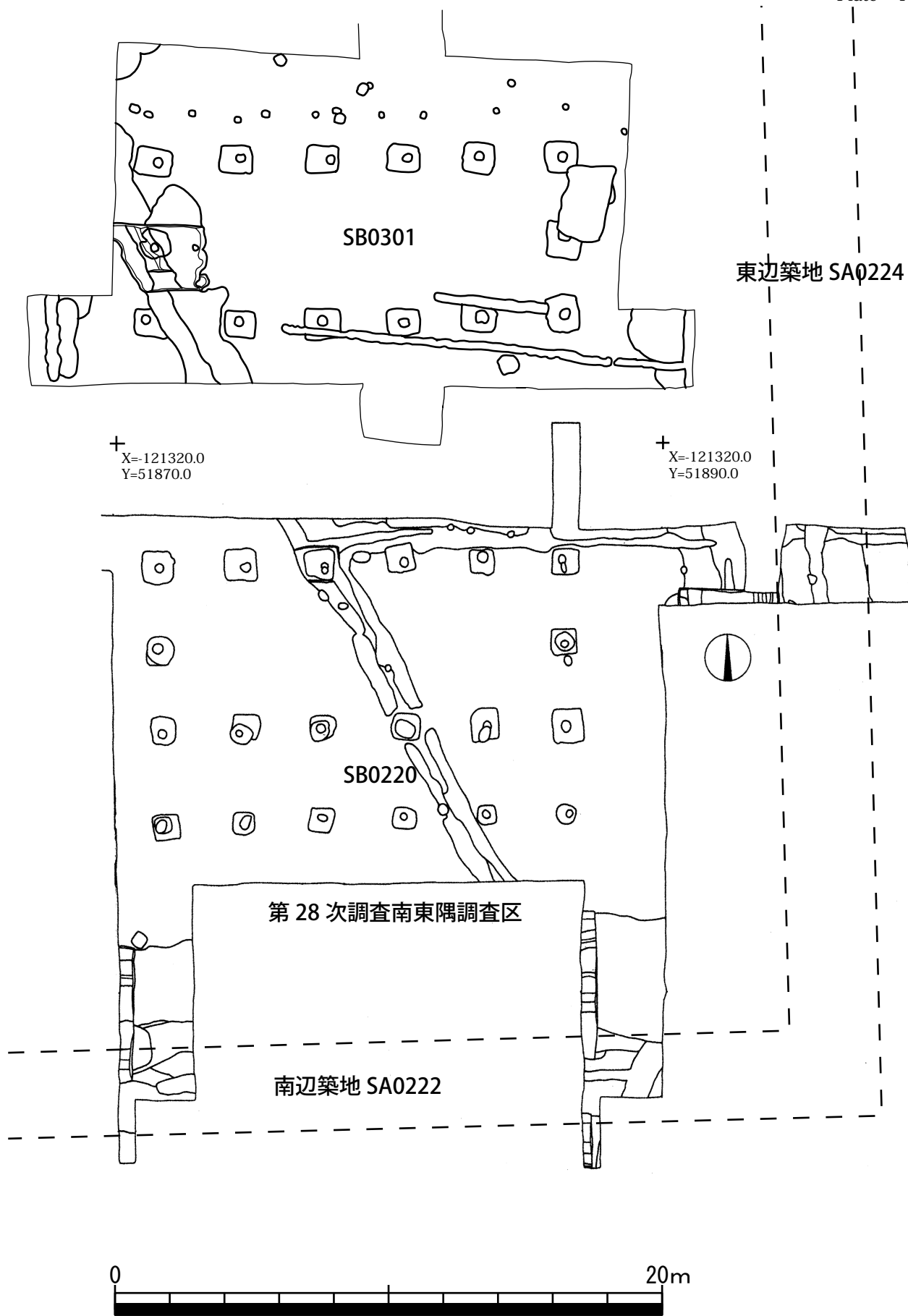


調査区位置図 (1/1,250)

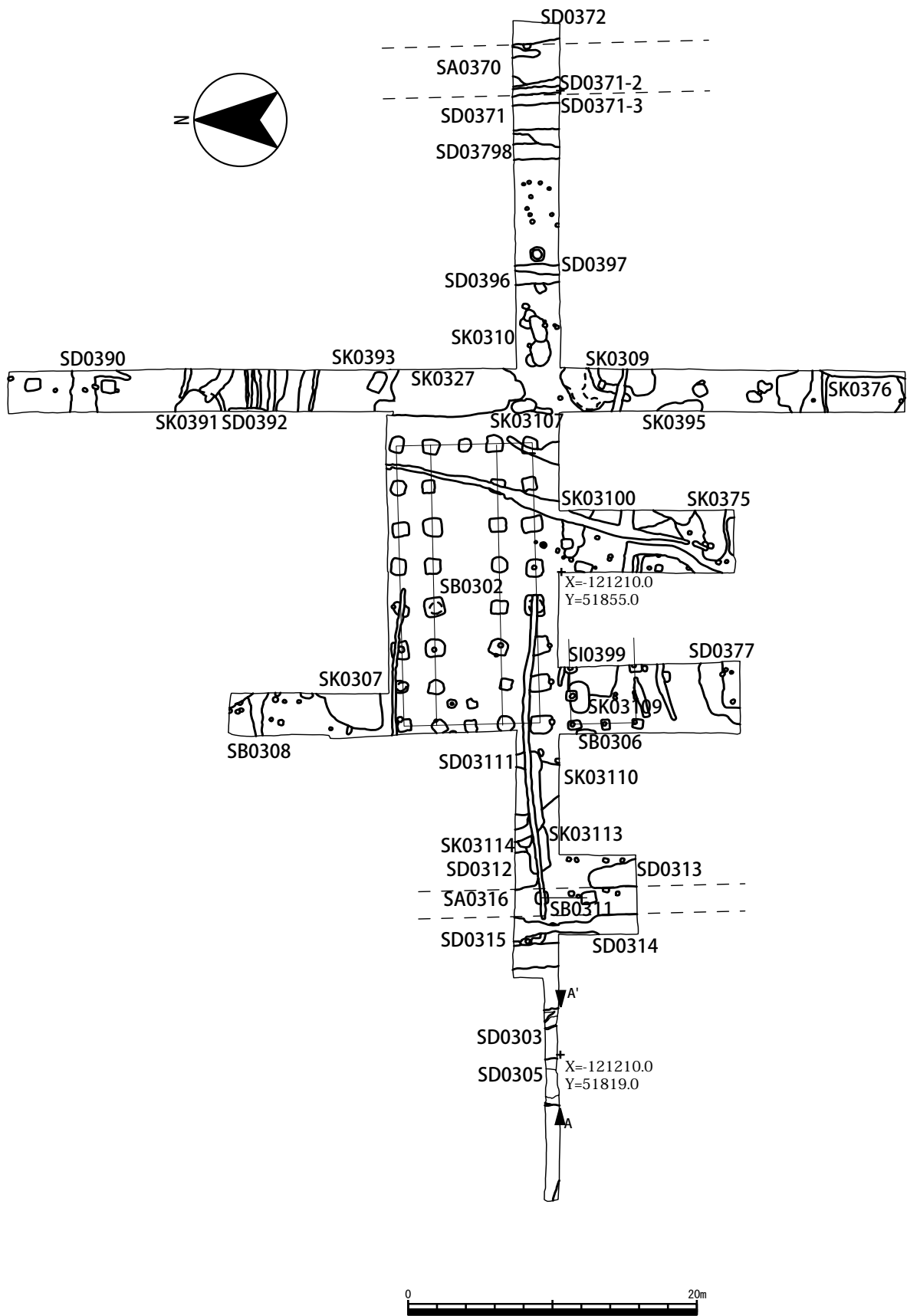




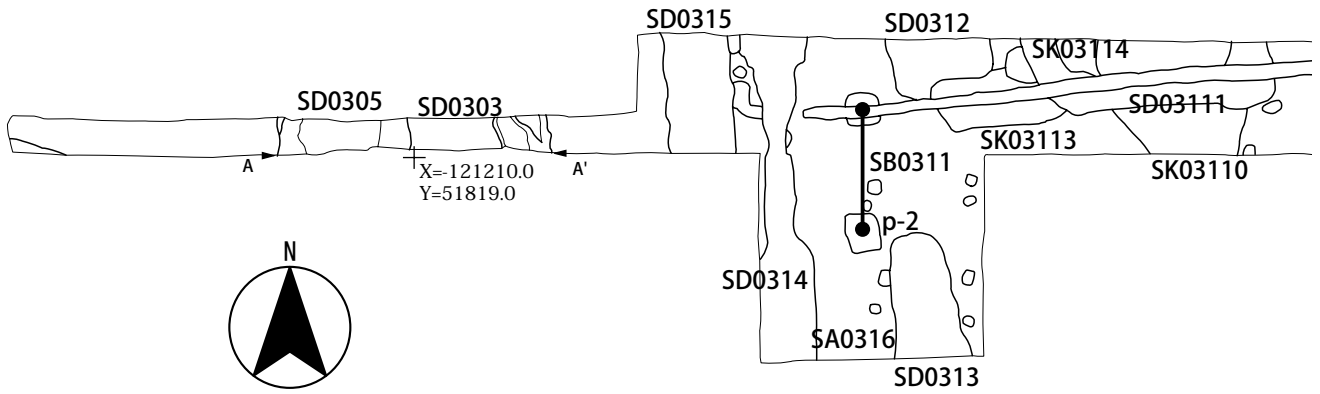
南東隅 (2) 調査区遺構配置図 (1/200)



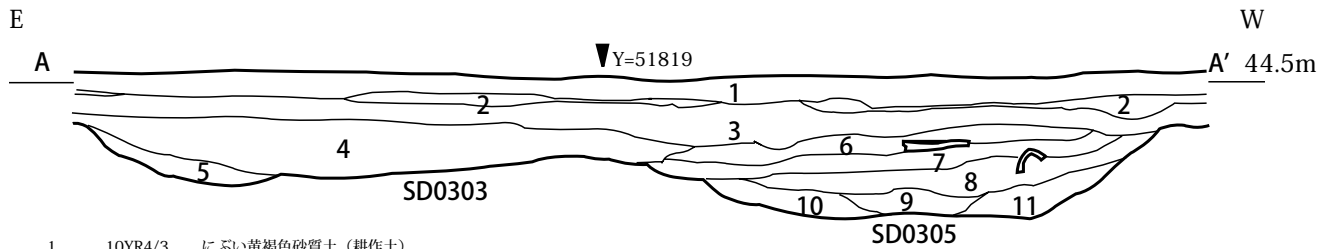
SB0301・SB0220 平面図 (1/100)



講堂東調査区全体遺構配置図 (1/400)

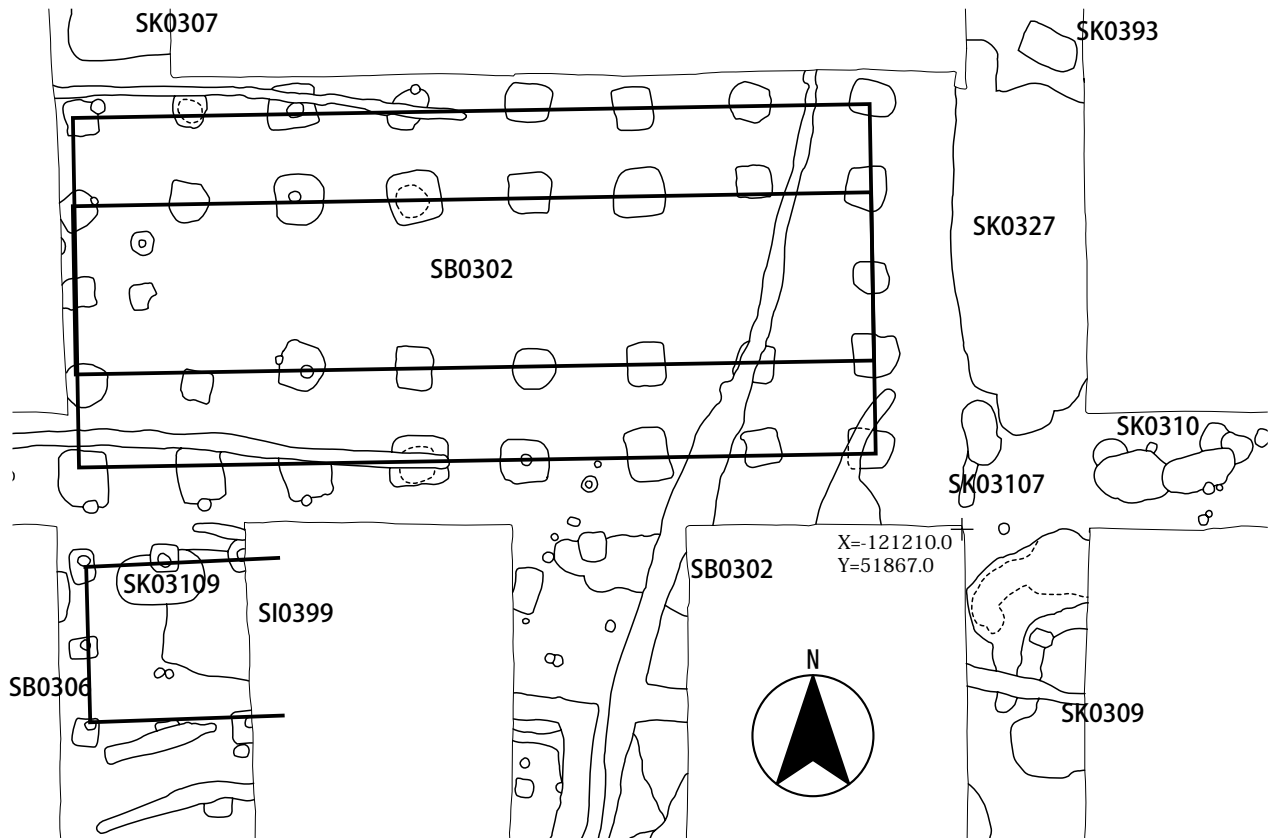


築地 SA0316・門 SB0311 平面図 (1/200)

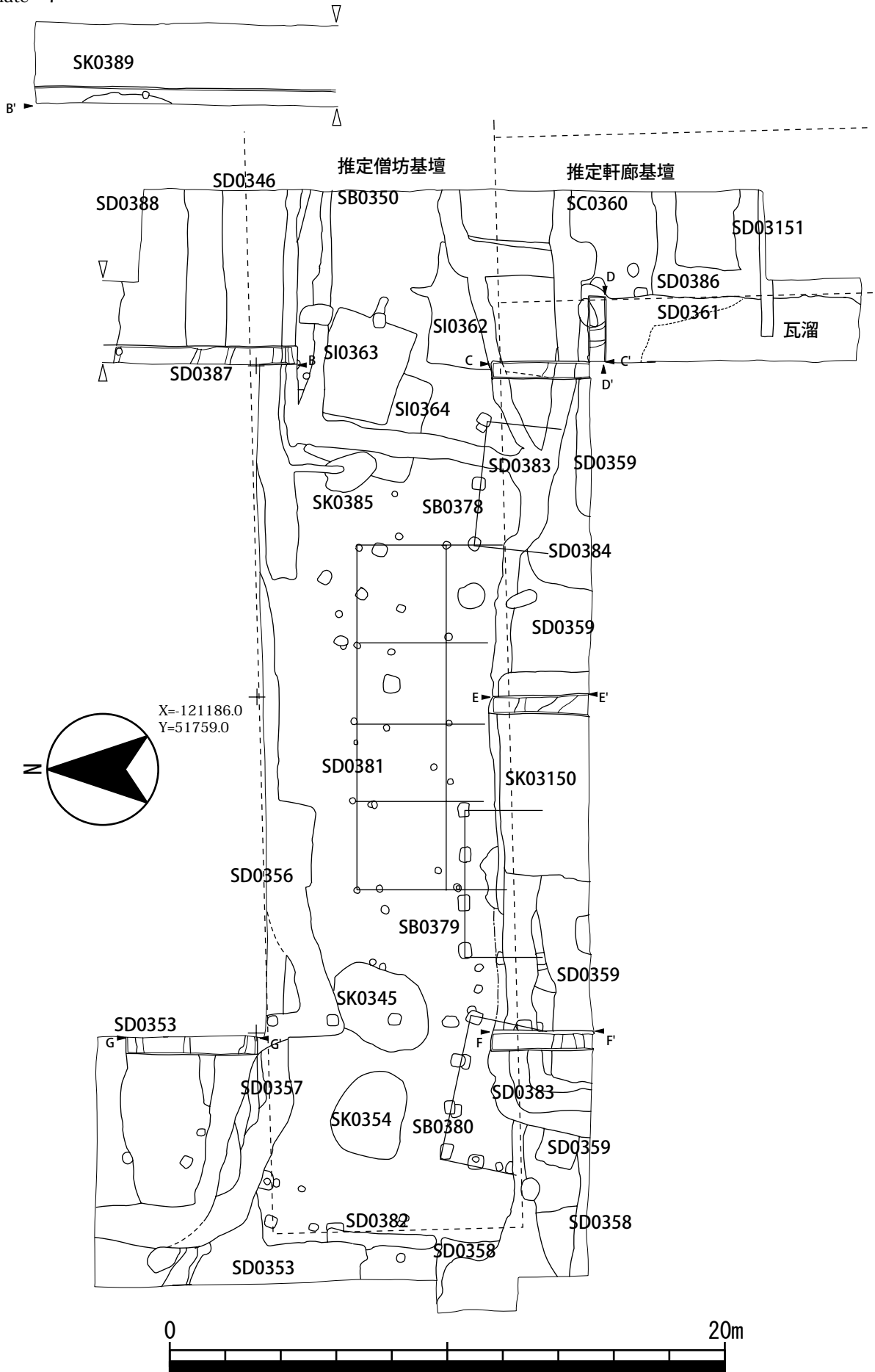


- |     |          |                        |
|-----|----------|------------------------|
| 1.  | 10YR4/3  | にぶい黄褐色砂質土 (耕作土)        |
| 2.  | 10YR5/8  | 黄褐色砂 (整地山砂)            |
| 3.  | 10YR4/6  | 褐色土 (旧耕作土)             |
| 4.  | 7.5YR4/4 | 明褐色土 瓦を含む              |
| 5.  | 7.5YR5/6 | 明褐色土 下面に瓦含む            |
| 6.  | 7.5YR5/8 | 明褐色土 土師器・灰釉陶器等含む       |
| 7.  | 7.5YR4/6 | 褐色土 土師器含む              |
| 8.  | 10YR4/6  | 褐色土 炭・焼土・土師器多く、瓦きわめて多い |
| 9.  | 10YR4/6  | 褐色土                    |
| 10. | 10YR4/4  | 褐色土 瓦多く含む              |
| 11. | 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 ほぼ瓦からなる        |

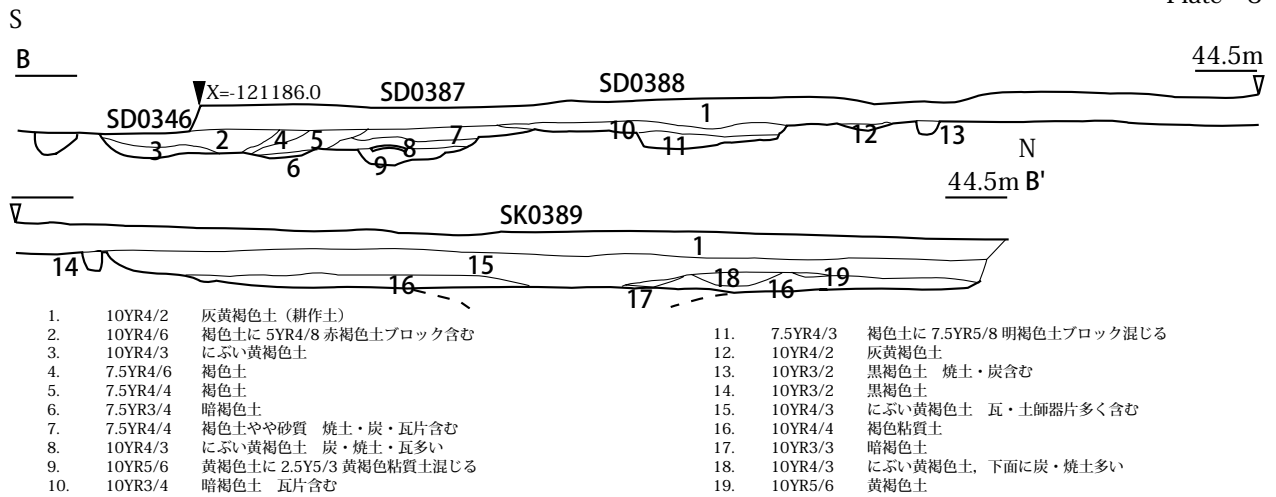
土坑 SK0303・SK0305 断面図 (1/50)



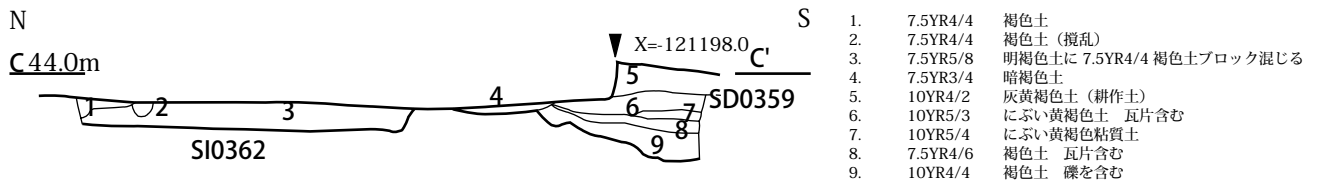
掘立柱建物 SB0302・SB0306 および土坑群平面図 (1/200)



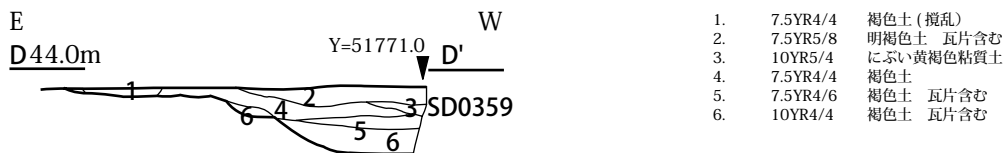
僧坊調査区遺構配置図 (1/200)



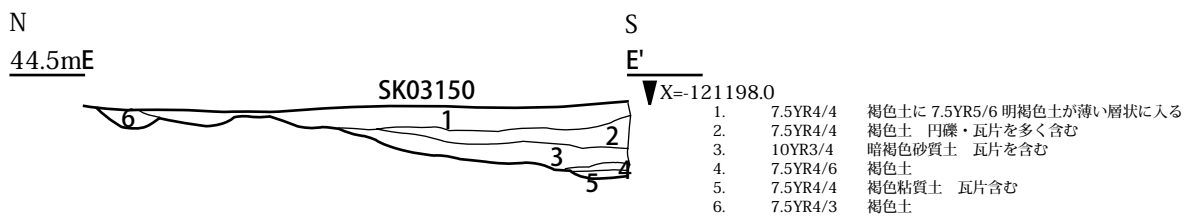
僧坊推定地 Y=51771 ライン北サブトレンチ断面図 (1/50)



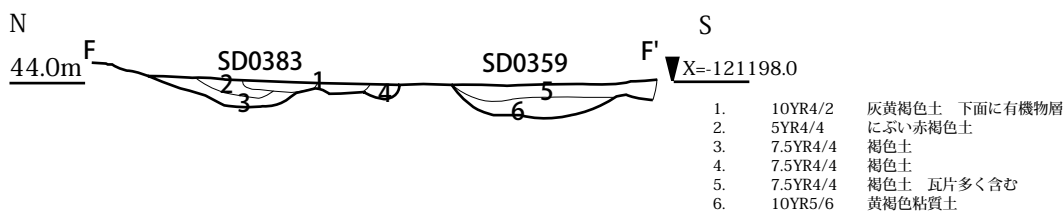
僧坊推定地 Y=51771 ライン南サブトレンチ断面図 (1/50)



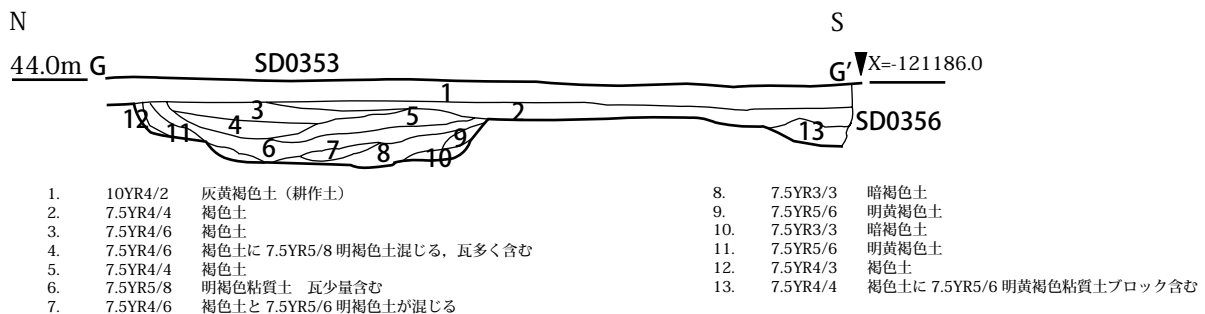
僧坊推定地 X=121198 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)



僧坊推定地 Y=51759 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)

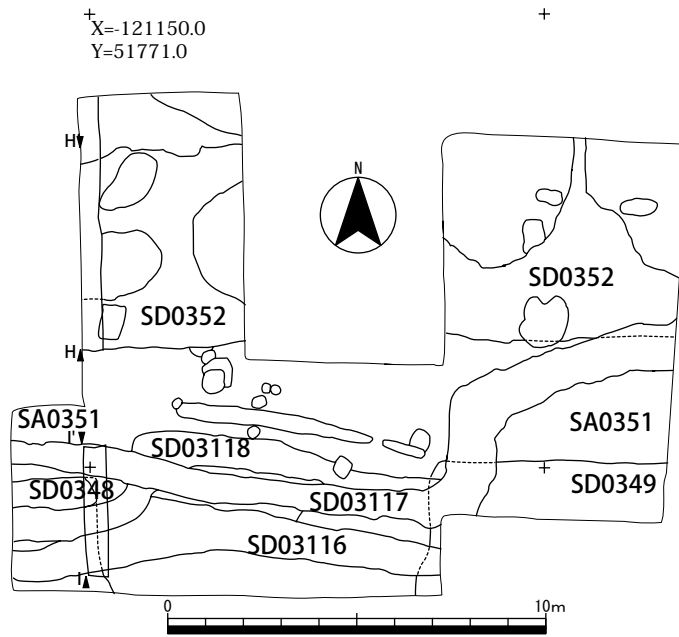


僧坊推定地 Y=51747 ライン南サブトレンチ断面図 (1/50)

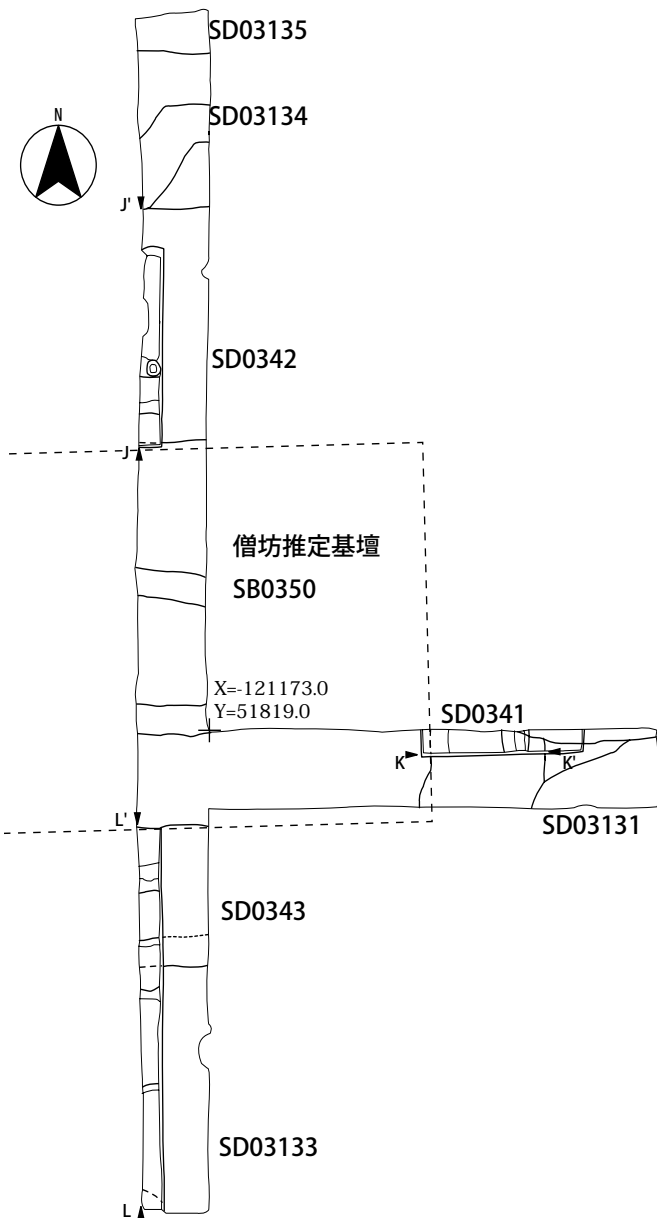


僧坊推定地 Y=51747 ライン北サブトレンチ断面図 (1/50)

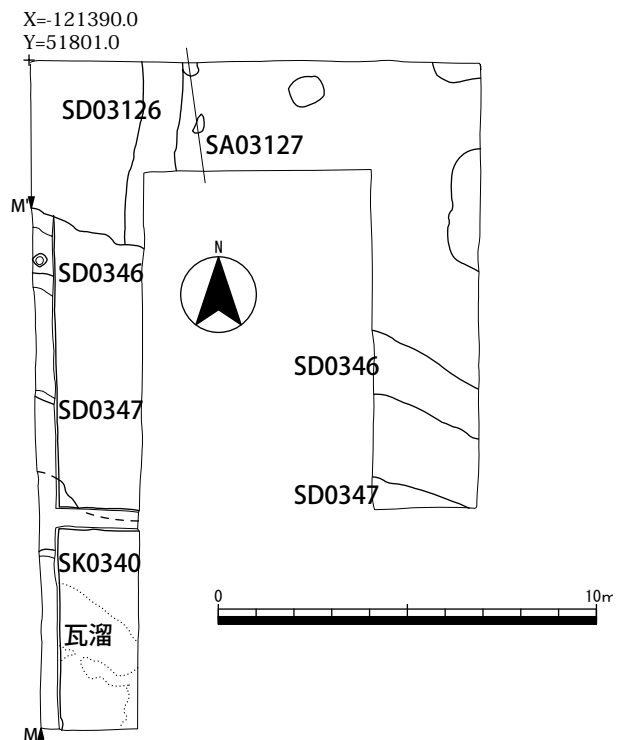




北門推定地調査区遺構配置図 (1/200)



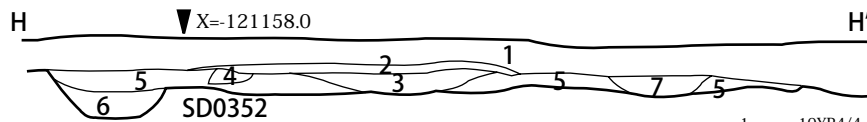
僧坊推定地東調査区遺構配置図 (1/200)



鐘楼(経蔵)推定地調査区遺構配置図 (1/200)

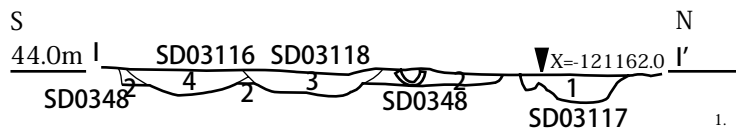
S  
44.5m

N



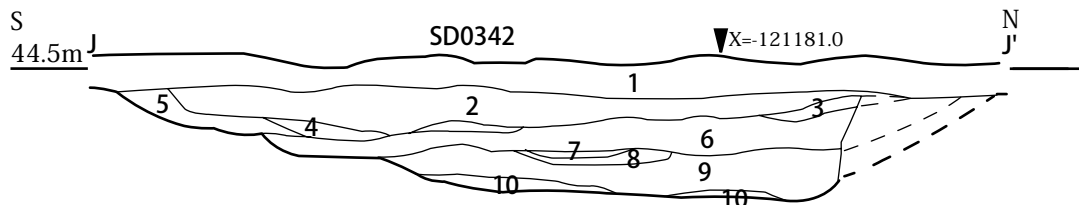
- |    |          |                      |
|----|----------|----------------------|
| 1. | 10YR4/4  | 褐色土 (耕作土)            |
| 2. | 10YR4/3  | にぶい黄褐色砂質土            |
| 3. | 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 瓦・土師器片含む     |
| 4. | 10YR4/4  | 褐色土 (攪乱)             |
| 5. | 7.5YR4/6 | 褐色土 瓦片多く含む, 上面に灰釉陶器片 |
| 6. | 7.5YR5/6 | 明褐色土 瓦細片・炭含む         |
| 7. | 7.5YR4/3 | 褐色土 (攪乱) 瓦多く含む       |

北門推定地調査区 Y=51771 ライン北サブトレンチ断面図 (1/50)



- |    |          |                         |
|----|----------|-------------------------|
| 1. | 10YR4/4  | 褐色土 円礫・瓦を含みしまりがない       |
| 2. | 7.5YR4/4 | 褐色土 瓦を含む                |
| 3. | 7.5YR4/4 | 褐色粘質土 上面に瓦を含む           |
| 4. | 10YR4/4  | 褐色土 中央部に瓦・礫多く含む, しまりがない |
| 地山 | 7.5YR5/8 | 明褐色土                    |

北門推定地調査区 Y=51771 ライン南サブトレンチ断面図 (1/50)



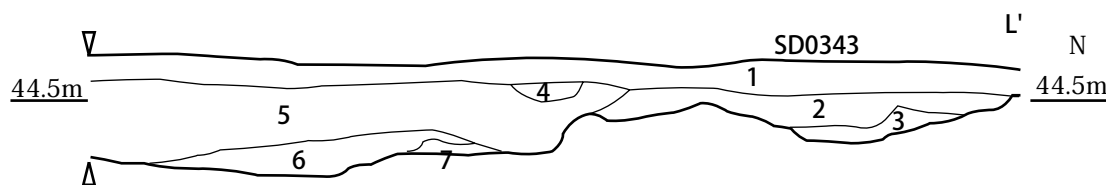
- |    |          |                     |     |          |                             |
|----|----------|---------------------|-----|----------|-----------------------------|
| 1. | 10YR4/2  | 灰褐色土 (耕作土)          | 6.  | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 瓦が大半を占める, 土師器片も含む      |
| 2. | 7.5YR4/6 | 褐色土 須恵器・土師器・瓦片を少し含む | 7.  | 5YR5/8   | 明赤褐色土                       |
| 3. | 7.5YR4/4 | 褐色粘質土               | 8.  | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 瓦・土師器片含む               |
| 4. | 7.5YR4/3 | 褐色土 大ぶりの瓦含む         | 9.  | 5YR5/8   | 明赤褐色土に 10YR5/6 黄褐色粘質土層状に混じる |
| 5. | 7.5YR4/2 | 灰褐色土                | 10. | 10YR3/4  | 暗褐色粘質土                      |

僧坊推定地東調査区 Y=51805 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)

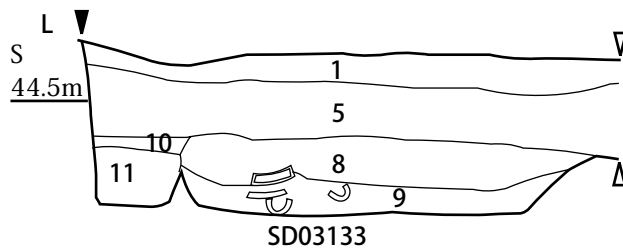


- |    |          |                    |
|----|----------|--------------------|
| 1. | 7.5YR4/6 | 褐色土 瓦片少し含む         |
| 2. | 7.5YR4/3 | 褐色土 しまりはなく, 瓦片少し含む |
| 3. | 10YR4/3  | にぶい黄褐色粘質土 瓦片含む     |

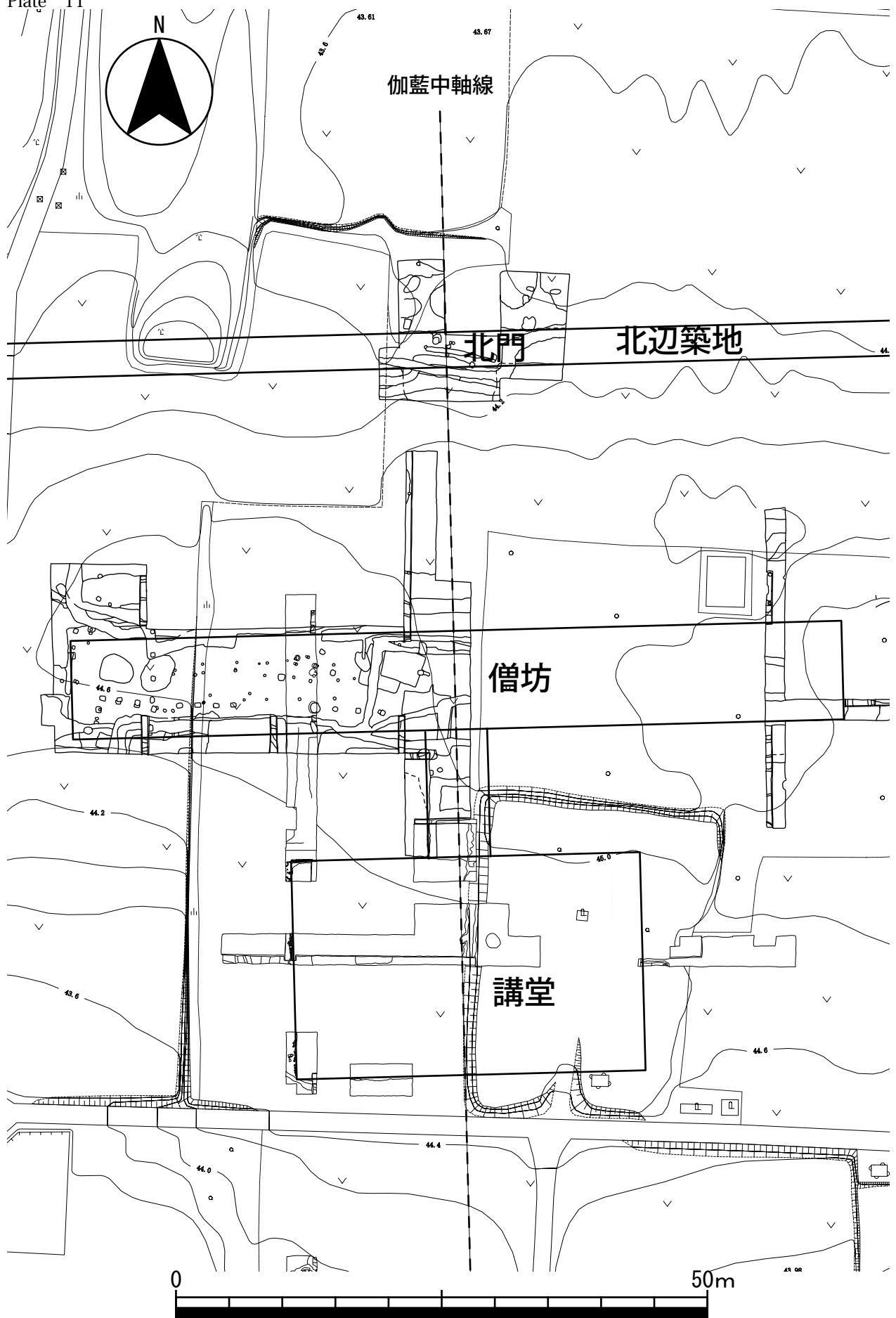
僧坊推定地東調査区 X=-121192 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)



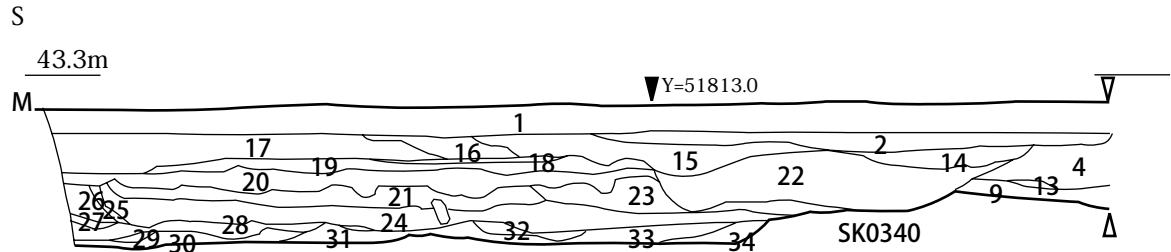
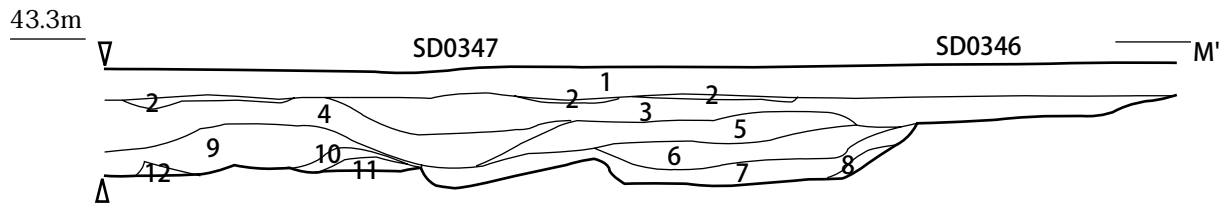
- |     |          |                        |
|-----|----------|------------------------|
| 1.  | 10YR4/2  | 灰黄褐色土 (耕作土)            |
| 2.  | 7.5YR4/6 | 褐色土に 7.5YR6/8 橙土やや混じる  |
| 3.  | 7.5YR4/6 | 褐色土に 7.5YR6/8 橙土ブロック含む |
| 4.  | 10YR4/1  | 褐灰色土 (攪乱)              |
| 5.  | 10YR4/4  | 褐色土 しまりがなく, 瓦をまったく含まない |
| 6.  | 10YR4/6  | 褐色土 しまる                |
| 7.  | 10YR5/6  | 明褐色土 瓦少々含む             |
| 8.  | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質土 瓦片を多く含む         |
| 9.  | 10YR4/6  | 褐色土 大ぶりの瓦を多く含む         |
| 10. | 7.5YR5/6 | 明褐色土                   |
| 11. |          | 瓦が多く空間がある              |



僧坊推定地東調査区 Y=51805 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)



僧坊・北門推定復元図 (1/500)

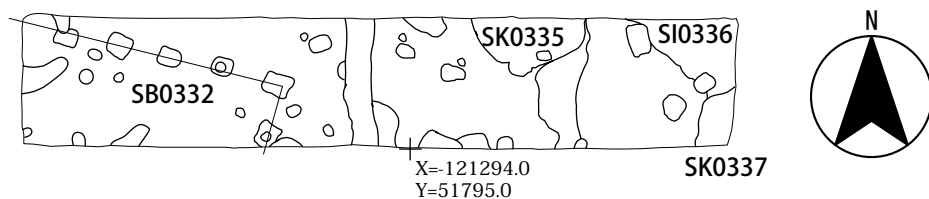


- |  |                              |
|--|------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 (耕作土)                  | 18. 7.5YR4/6 褐色土             |
| 2. 7.5YR4/6 褐色土                        | 19. 10YR4/4 褐色土              |
| 3. 7.5YR4/4 褐色土 瓦細片・近世陶器含む             | 20. 7.5YR5/6 明褐色土 固くしまる      |
| 4. 10YR3/4 暗褐色土 瓦細片を多く含む               | 21. 10YR4/4 褐色土              |
| 5. 7.5YR4/4 褐色土 7.5YR5/6 明褐色土ブロック・炭含む  | 22. 10YR3/2 黒褐色土 大ぶりの瓦びっしり含む |
| 6. 7.5YR4/3 褐色土 瓦細片含む、焼土・炭きわめて多い、よくしまる | 23. 10YR5/6 黄褐色土 炭含む         |
| 7. 10YR4/6 褐色土 やや砂質で、炭多く含む             | 24. 10YR3/3 暗褐色土             |
| 8. 10YR4/6 褐色土                         | 25. 7.5YR5/6 明褐色粘質土          |
| 9. 7.5YR4/4 褐色土 よくしまる、焼土・炭多い           | 26. 10YR4/6 褐色土              |
| 10. 7.5YR5/8 明褐色土                      | 27. 10YR4/2 灰黄褐色土            |
| 11. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭含む                | 28. 10YR5/6 黄褐色土             |
| 12. 7.5YR5/8 明褐色土                      | 29. 10YR4/1 褐灰色土             |
| 13. 10YR4/4 褐色土                        | 30. 10YR5/4 にぶい黄褐色土          |
| 14. 7.5YR4/4 褐色土 瓦片含む                  | 31. 10YR5/4 にぶい黄褐色土          |
| 15. 10YR4/6 褐色土 瓦片・円礫きわめて多い            | 32. 10YR5/8 明褐色土             |
| 16. 7.5YR4/6 褐色土                       | 33. 7.5YR4/3 褐色土             |
| 17. 10YR4/2 灰黄褐色土 瓦片きわめて多い             | 34. 7.5YR4/4 褐色粘質土           |

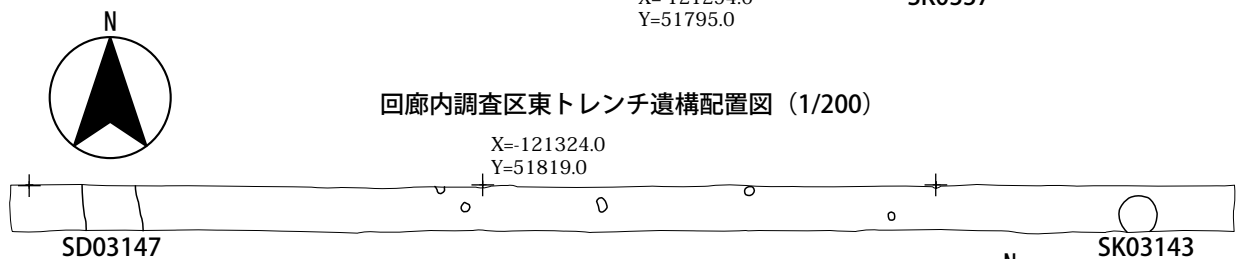
鐘楼 (経蔵) 推定地調査区 Y=51801 ラインサブトレンチ断面図 (1/50)



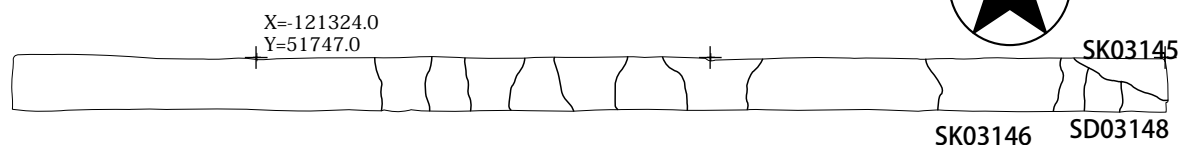
回廊内調査区西トレンチ遺構配置図 (1/200)



回廊内調査区東トレンチ遺構配置図 (1/200)

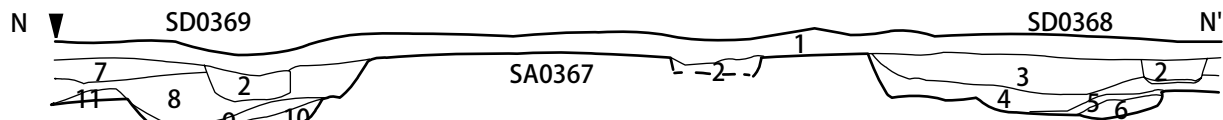


回廊南調査区東トレンチ遺構配置図 (1/200)



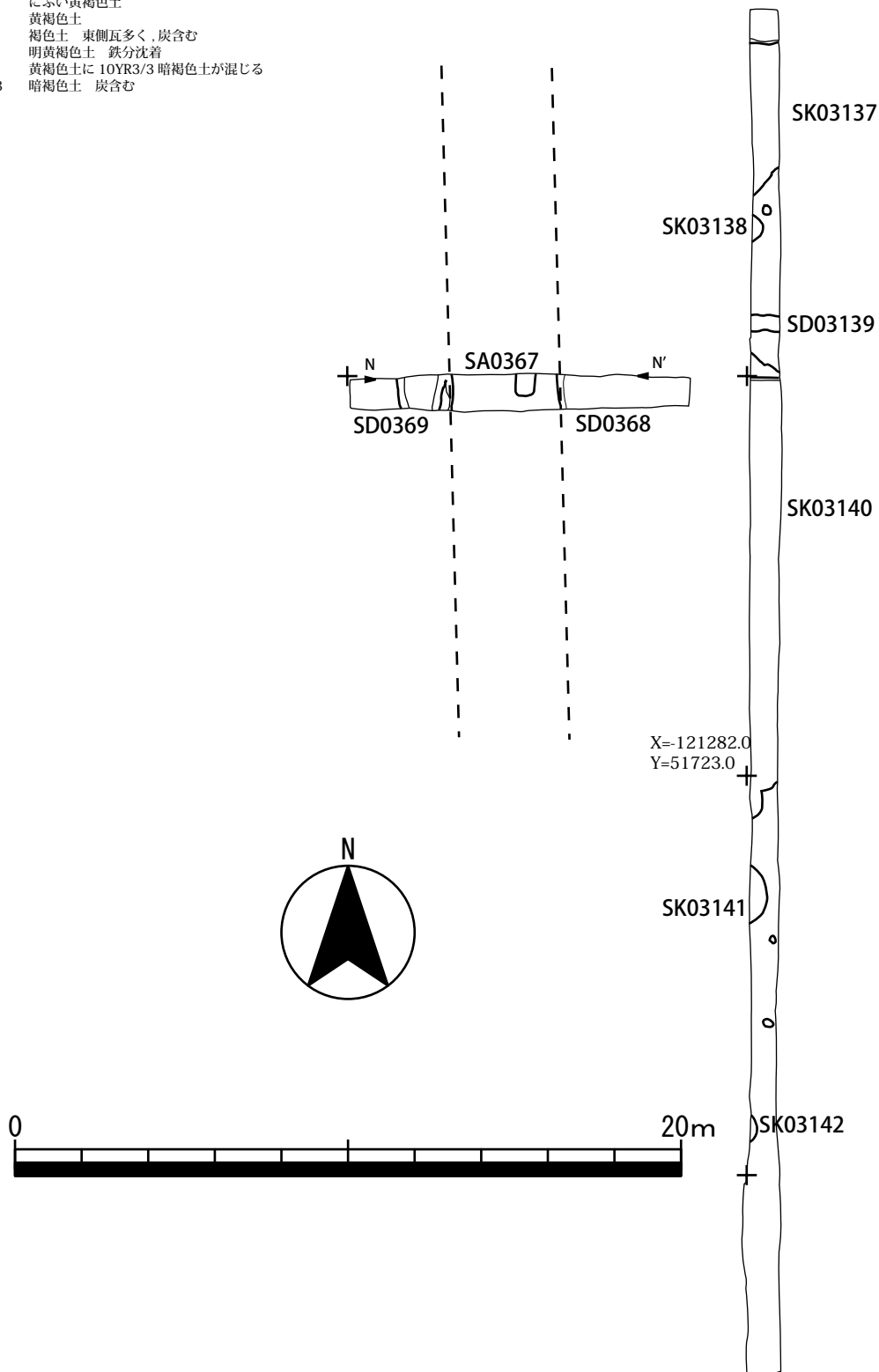
回廊南調査区西トレンチ遺構配置図 (1/200)

43.5m

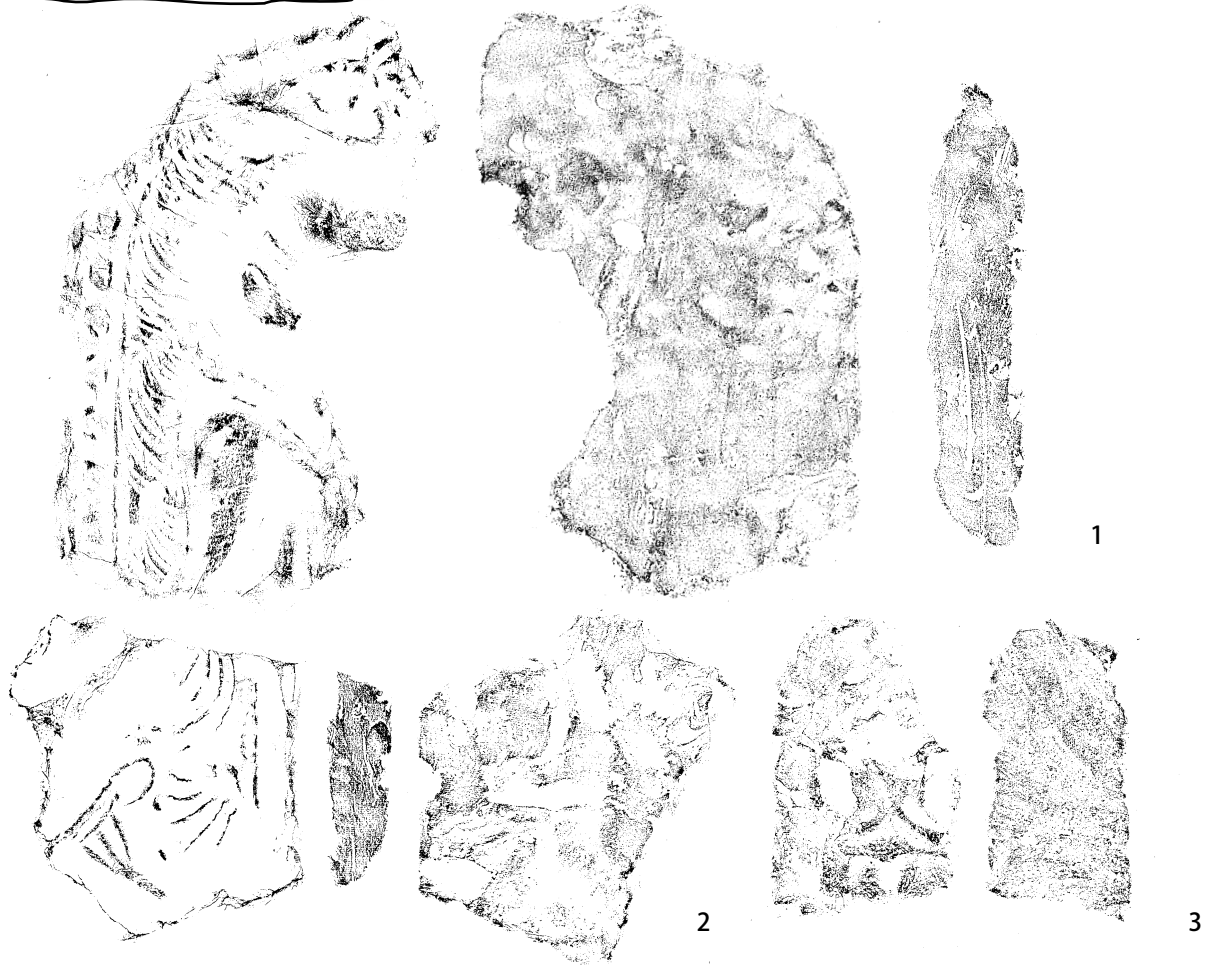
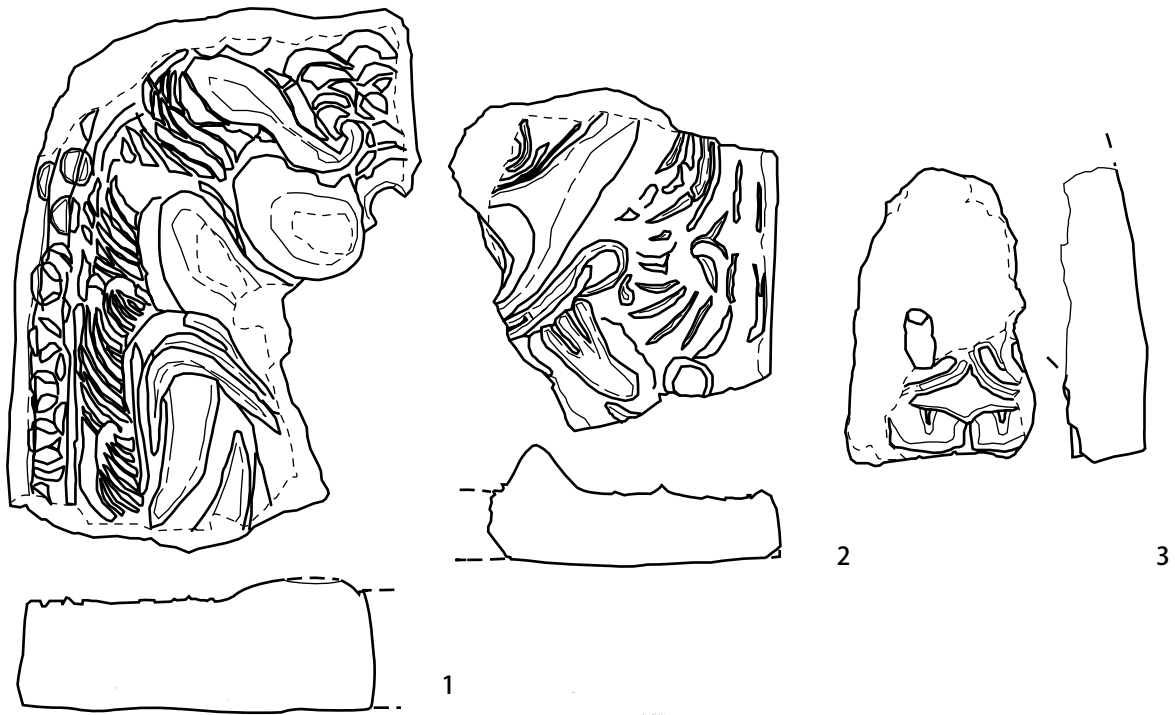


1. 10YR3/3 暗褐色土 (耕作土)
2. 10YR3/3 暗褐色土 (攪乱)
3. 10YR5/6 黄褐色土 瓦細片含む
4. 10YR4/6 褐色粘質土 よくしまり, 青色礫含む
5. 10YR6/6 明黄褐色土 鉄分沈着
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
7. 10YR5/6 黄褐色土
8. 10YR4/4 褐色土 東側瓦多く, 炭含む
9. 10YR6/8 明黄褐色土 鉄分沈着
10. 10YR5/6 黄褐色土に 10YR3/3 暗褐色土が混じる
11. 7.5YR3/3 暗褐色土 炭含む

回廊西調査区 X=-121270 ライントレンチ断面図 (1/50)

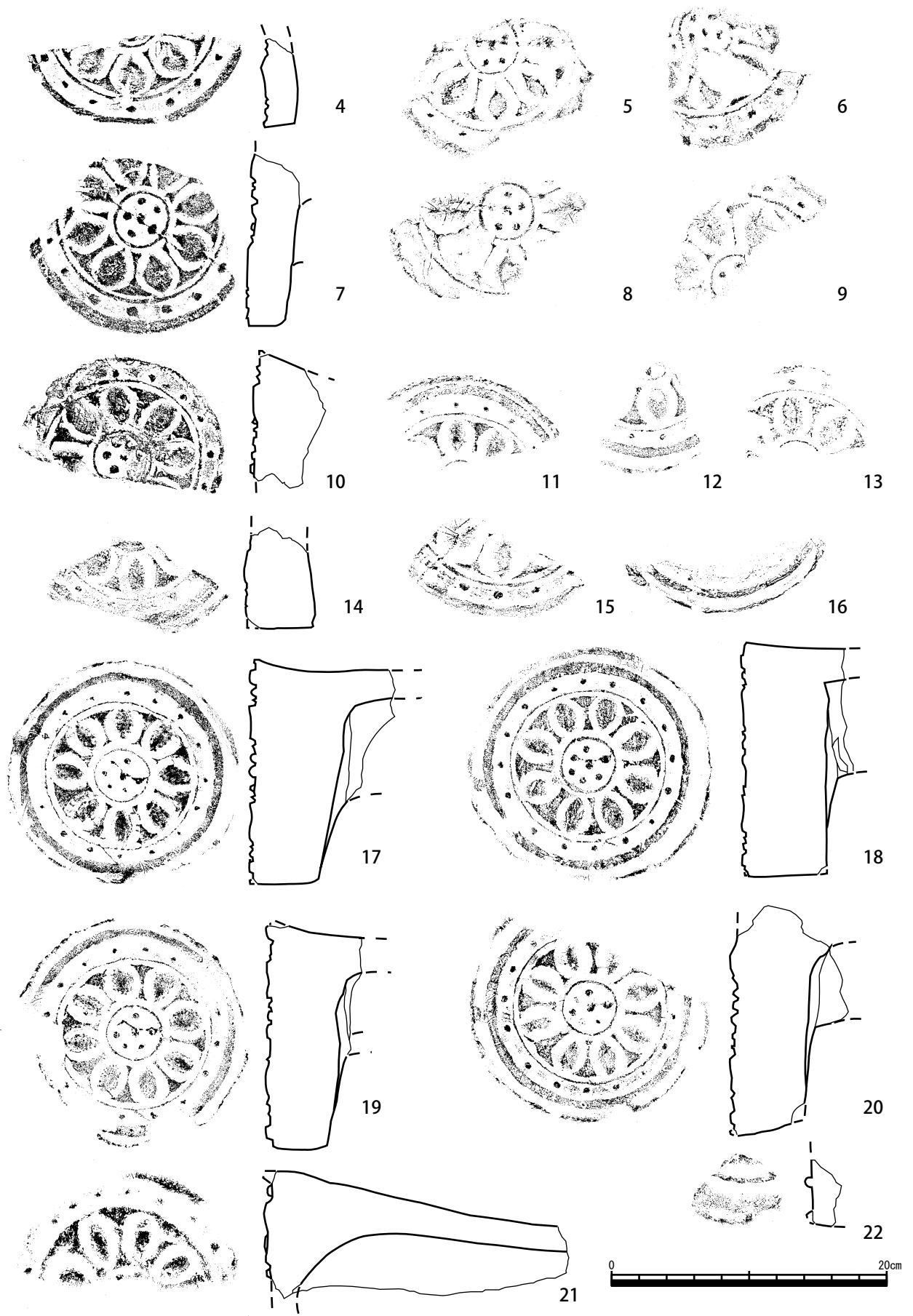


回廊西調査区遺構配置図 (1/200)

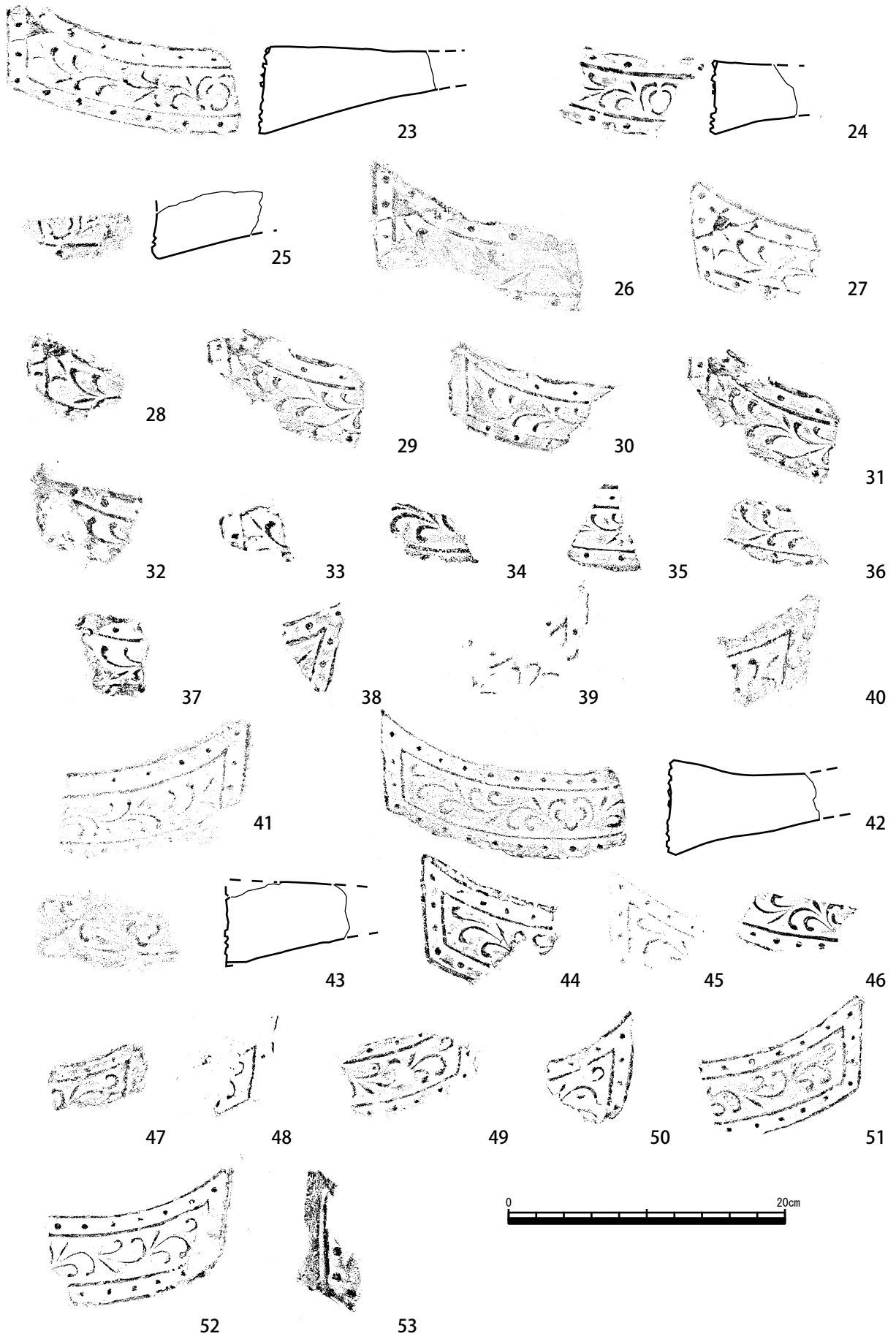


鬼瓦 (1/4)

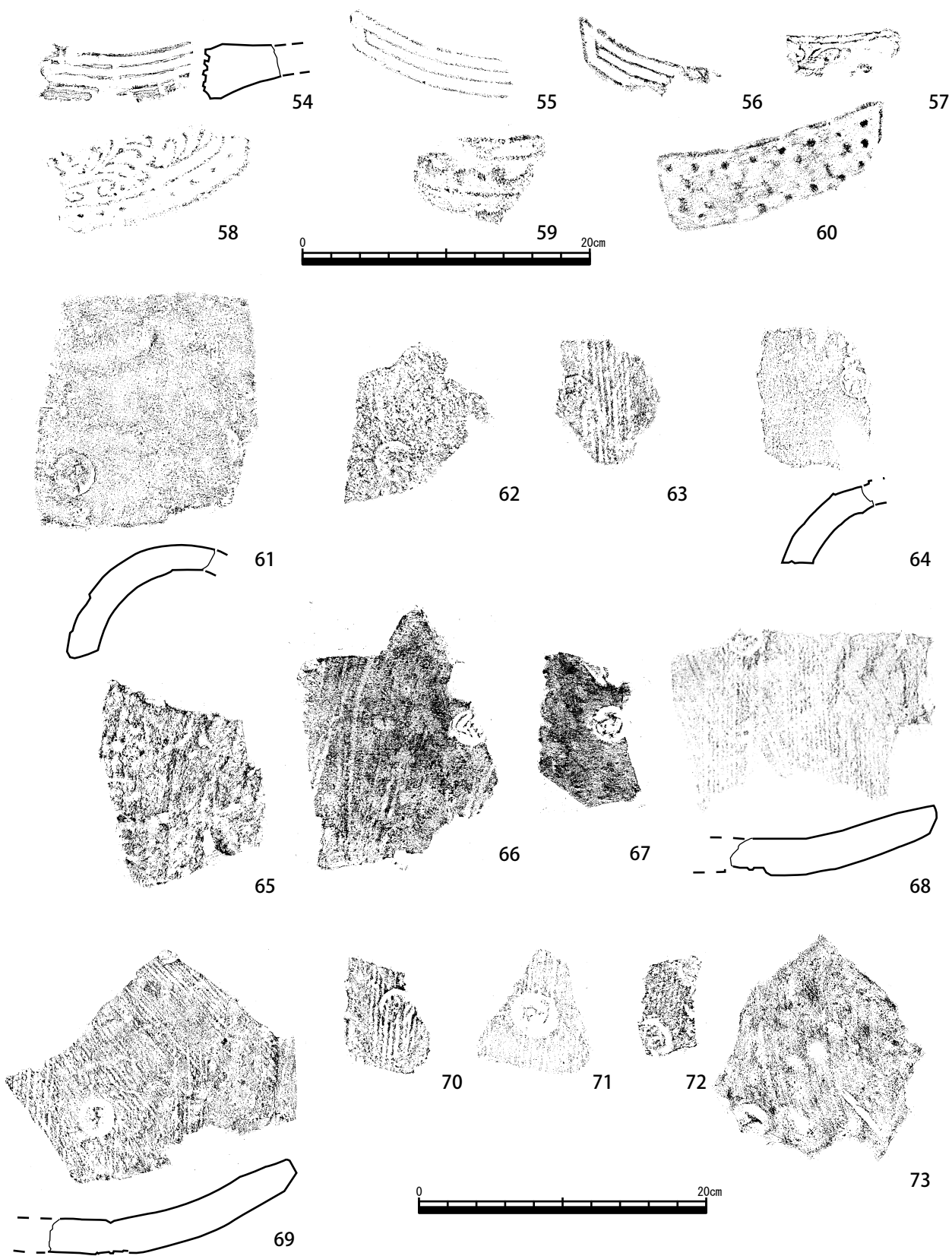




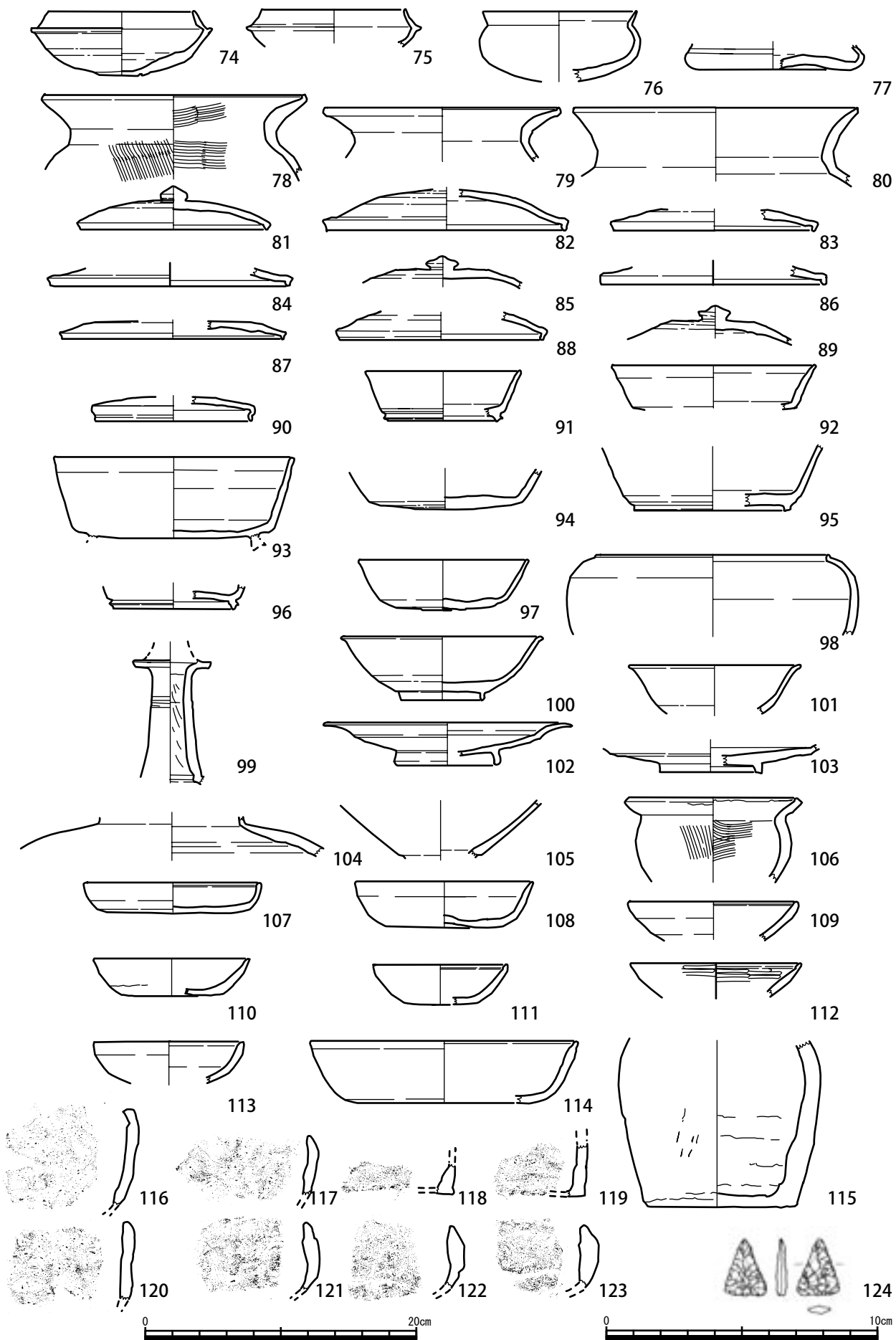
軒丸瓦 (1/4)



軒平瓦 (1/4)



軒平瓦·刻印瓦 (1/4)





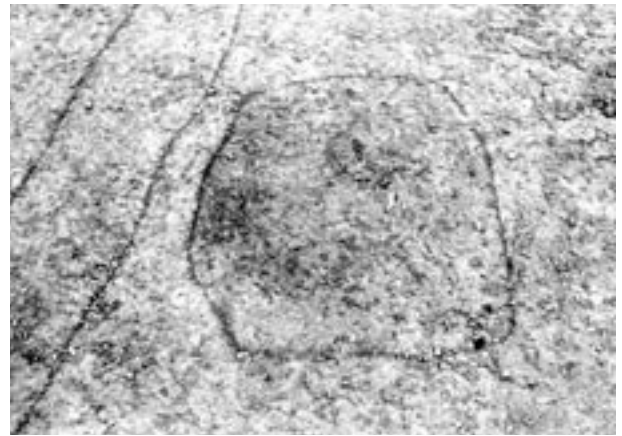
南東隅 (2) 調査区 SB0301 検出状況



SB0301 (南から)



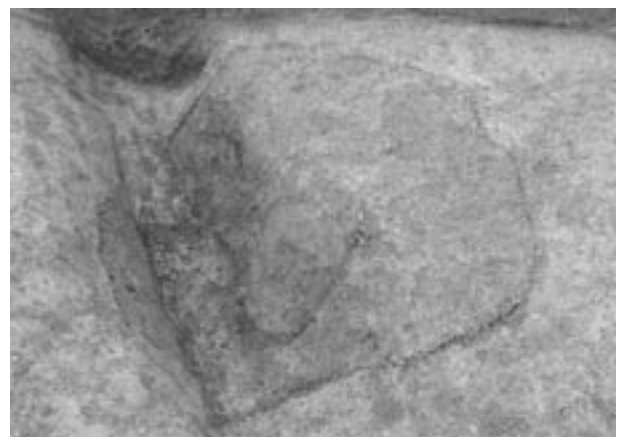
SK0320・SK0321



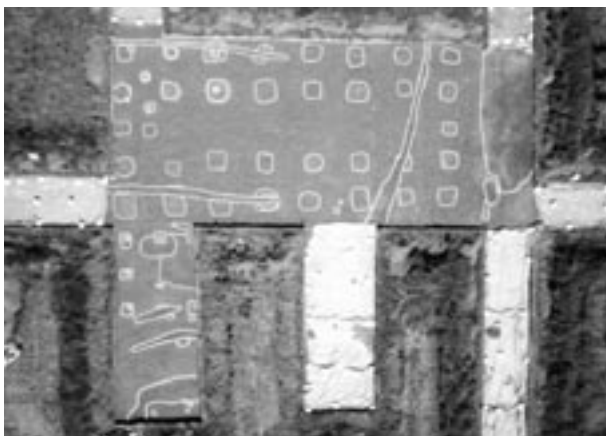
SK0322



SD0318・SD0319



SB0301 P-14



講堂東調査区 SB0302・SB0306 検出状況



SB0302



SB0306



SK0307 (南から)



855 ライン南トレンチ (北から)



SX03101



867 ライン南トレンチ (北から)  
手前に SK0309



207 ライントレンチ (西から)  
手前に SK0310



867 ライン北トレンチ (南から)



SB0311 (北から)



SB0311 P-2

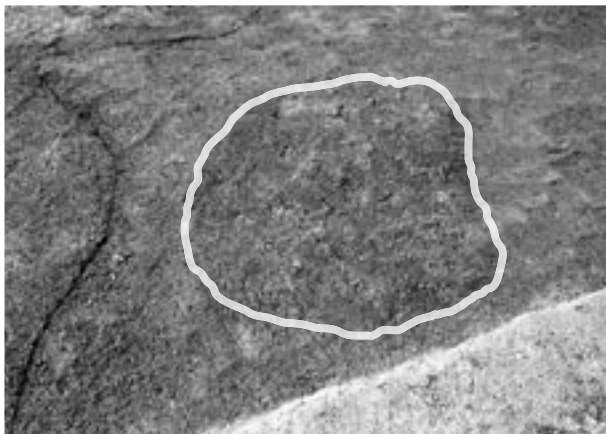




現地説明会風景



SD0303・SD0305



SK0393



鐘楼(経蔵)推定地調査区全景(北から)



SK0340



北門推定地調査区全景(南から)



北門推定地調査区全景(上が南)



SD0352 サブトレンチ



僧坊推定地・僧房推定地東調査区全景（西から）



僧坊推定地調査区全景（西から）



SC0360・SD0361



SI0362



SI0362・SI0363・SI0364



SB0378



SB0379



SB0380



SK0345・SK0354



771 ライン北サブトレンチ



198 ラインサブトレンチ



747 ライン南サブトレンチ



747 ライン北サブトレンチ



僧坊推定地東調査区全景(南から)



SD0343・SD03133 サブトレンチ



SD0342 サブトレンチ





回廊内調査区西トレンチ  
全景(西から)



SB0331



回廊内調査区東トレンチ  
全景(東から)



SB0332



回廊南調査区西トレンチ  
全景(東から)



回廊南調査区東トレンチ  
全景(東から)



回廊西調査区東トレンチ  
(南から)



東トレンチ(北から)



回廊西調査区西トレンチ  
(東から)



SA0367(南から)



鬼瓦(参考)



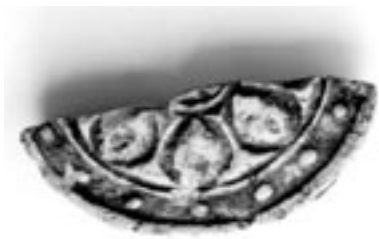
1



2



3



4



5



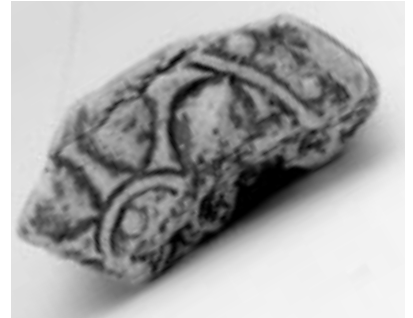
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15

鬼瓦・軒丸瓦



16



17



18



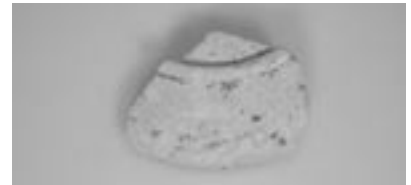
19



20



21



22



23



24



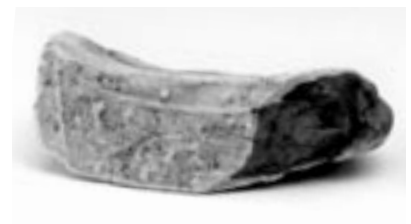
26



27



29



30



41



42



43

軒丸瓦・軒平瓦



44



46



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



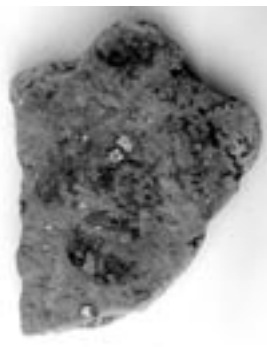
59



60



61



62



63



64

軒平瓦・刻印瓦





65



66



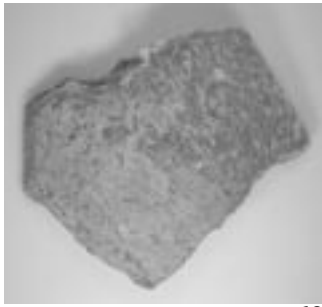
67



68



72



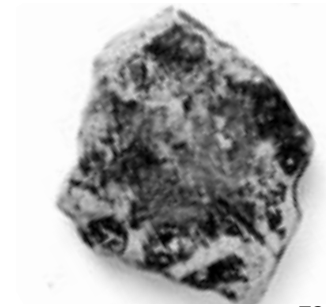
69



70



71



73



74



76



81



82



93



99



100



102



105



107

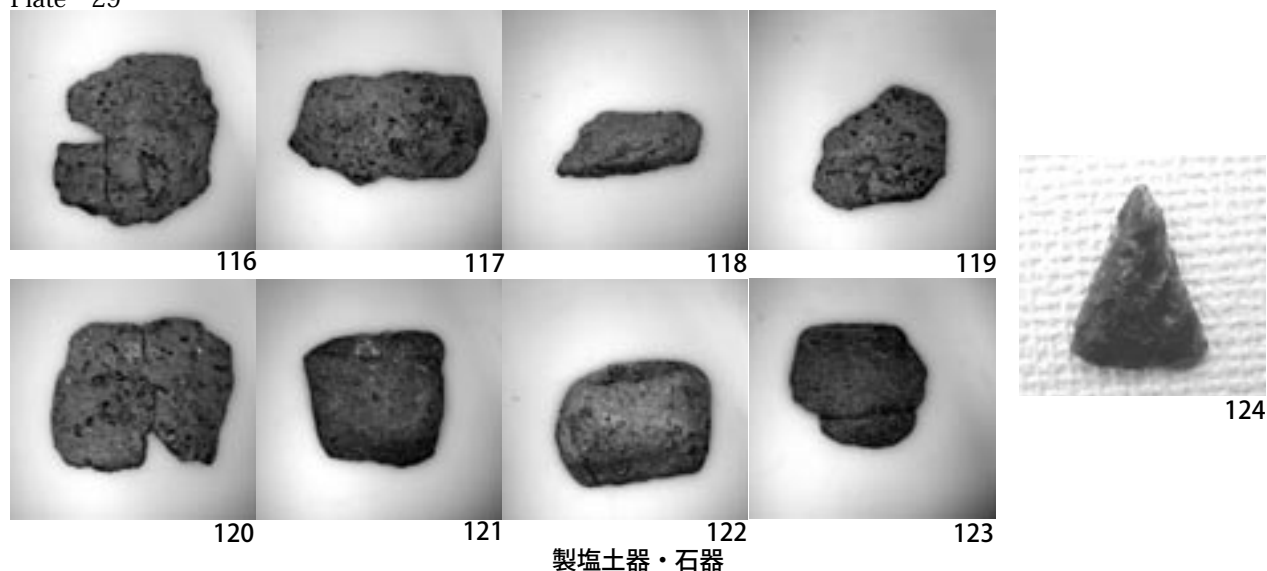


108



115

刻印瓦·土器·陶器



## English Summary

Kokubun-ji Temple was built in each Province by Emperor Shomu's imperial edict in the middle of 8th century. The temple consists of a monastery and nunnery. Ise Kokubun-ji Temple site is on a parcel of land which is located at the left bank of Suzuka River in Kokubu-town, Suzuka-city.

Suzuka-city board of education carried out identification research to protect the remains from 1988 to 1990. They identified the temple compound area which is surrounded by the tamped-earth walls with roofs, each of which measures approximately 180 meters long. After the results of the research were documented, almost all of land of the remains had been switched to public-owned land from 1996 to 1998.

Research to find the locations of buildings were carried out in 1999. This was to make plans to improve the site as a park of historical site. The 22nd to 25th and 28th researches were already carried out and the location and size of the lecture hall, the golden hall, south gate, middle gate and the cloister were identified.

The purpose of the 29th excavation was to confirm the location and size of a priests' dormitory and a pagoda. Also to confirm how the eastern-half of the serene and peaceful land in the temple compound area was utilized. The priests' dormitory, SB0350 was confirmed as its location being twelve meters north of the lecture hall. Although the foundation platform of the priests' dormitory was completely destroyed and lost, it will be possible to restore the priests' dormitory in a terraced house style in the size of approximately seventy-two meters from east to west and approximately nine meters from south to north by using such things as the ditch which circles the land where the priests' dormitory was located. There is a high possibility that the priests' dormitory was connected to the lecture hall with a roofed passage.

At the eastern-half of the temple compound area, we detected a large size embedded-pillar building at the east-side of the lecture hall and the southeastern corner of the temple compound area respectively. A lot of earthenware which was used as tableware and salt-making pottery were excavated at the pits around the former, SB0302. Therefore, it seems that the building was a facility to serve meals to the priests. The later, SB0301 has been thought that the building must have been used as a lodging house for the priests in a leadership position with the embedded-pillar building SB0220 which was excavated in the 28th excavation, as one set.

Regarding the pagoda, we couldn't find any marks which show the location of the pagoda in the excavation although we made trial trenches in several rows inside and outside of the cloister.

# 報告書抄録

ふりがな	いせこくぶんじあとよん
書名	伊勢国分寺跡 4
編著者名	藤原秀樹
編集機関名	鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市考古博物館
編集機関所在地	三重県鈴鹿市国分町 224
発行年	平成 16 (2004) 年 3 月 31 日
所収遺跡名	伊勢国分寺跡
所在地	三重県鈴鹿市国分町字堂跡 292 ほか
町村コード	24207
遺跡番号	361
北緯	34° 54′ 32″
東経	136° 33′ 50″
調査期間	平成 15 年 8 月 4 日～平成 16 年 3 月 15 日
調査面積	2, 374 m <sup>2</sup>
調査原因	史跡整備
種別	寺院
主な時代	奈良・平安・鎌倉
主な遺構	僧坊基壇・北門基壇・大型掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝
主な出土遺物	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・埴・須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器
特記事項	伊勢国分寺跡の僧坊の規模を確認。講堂東の大型掘立柱建物は食堂か。 伽藍地南東隅にも 2 棟の大型掘立柱建物が並列して建っている。

## 伊勢国分寺跡 4

発行日 平成 16 年 3 月 31 日  
編集・発行 鈴鹿市教育委員会  
鈴鹿市考古博物館  
〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224  
TEL0593-74-1994 FAX0593-74-1994  
E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp  
URL <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>  
印刷 八野ワークセンター

# Ise Kokubun-ji Temple Site

## Preliminary Report No.4

March, 2004

Suzuka City Board of Education

Mie Pref., Japan